(員動総神精民國) !!に後銃は等我 ! に線戦は士兵★

輯編★郎路生麻



號七第 卷五十第 行發日五十月每

行發社誌雜柳川



### 誌 雜 柳 川

號七第 卷五十第

> 謹 御關 2 東 で 及

月げ阪

ま

\$

神

地

方

0

水

害

か

### 見 和 + 舞 三申び 士 上 京

抄句洞朽不

郎 路 生 麻

亡奈 水土 そ金 命良 渦 地 の献 にへの會 思納 C 似來 あ社 して 出 2 枕 ~ を す す 杭 T 3 を

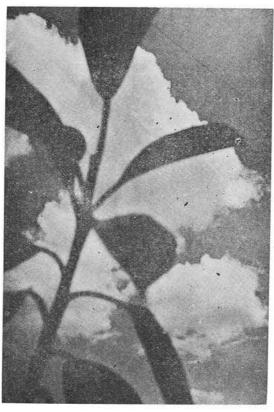
j

つ

3

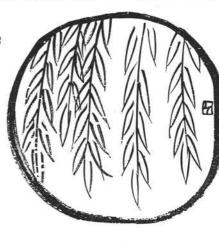
氣

か



III 柳 協 會

柳	柳	JII	<b>传</b> 久 翁良		後	飛	各	<b>募路</b>	_	JIJ	近	不	Ш	武	柳川	詩	柳川						JI			
界	<b>景人</b>		古	協		燕	地	1	青		作	朽	雜	玉	解題ご	人	評	早	武藏	尻	Hill	買か	柳			
展	佐素		稀祝	の	記	往		ン キ :	空	柳		洞	案	<u>]i </u>	過ご例	複	釋	Δ	の	馬	柳つ	7	街		)1]	ĺ
望	々描	協	智	·.	:	來	柳		:		柳	何	水	-	句	122	2000	合	切	續	れ	Ó				
:	末 :	:	賀記	頁	記…(110)	÷			į		15715	抄	內	篇	(1)	服	百		拔	THE	10	句	雜		trir	1
÷	Ξİ	i	合		ė		壇	į		塔	樽		17	研	Z		4	點	\$	稿	1	0			131	,
•	福:		曾		i				i				:		÷	:	句				:	解釋	筆		+11	_
÷	君:	÷	呈		i		÷		:				•	究	1			•	÷		÷	作学:			雜	
	. :	i	12		i	÷	:		:		:			乏			:		÷	į	i					
	•	•	就			i			•		1	•	i	90		:			÷	i	i				誌	
:			:		社	÷	÷	<u> </u>	奥	諸	硫	版		虹森梅	路	高	Mitc	長	ii	岩石	奥	生		表紙	, ,	
					關	誻		100	村	нн	生		•		P-11				14	00000	12020	0.0000		紙	目	1
•		:			社關係の		•		H-		路	生		#J-	郎	彩	生	野	本	崎	村	方				7
÷	- :	•			(0)		•		路		郎	路	÷	省東於農	da	亞	路	文	葉	柳	丹	敏		柴	次号	虎
•					A	家	•			4	選	郎	÷	二魚屋	編								:	分安		
:	•	:	•		:	38	:	選;	巽:	家	135	ED.	i	一点在	NSITO .	鈍	ER.	庫	光	石:	路:	郎		柴谷宰二郎		
$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$		Ė	$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$	<u>.</u>	$\dot{\Box}$	$\dot{\bigcirc}$	$\dot{\Box}$	~	$\dot{\Box}$	$\dot{\Box}$	$\dot{\sim}$	$\dot{\circ}$	$\dot{\bigcirc}$	$\dot{\frown}$	Ċ	$\dot{\frown}$	$\dot{\frown}$	$\dot{\frown}$	郎		
$\equiv$	$\overline{\mathfrak{D}}$	19	<b>E</b>		9	$\Xi$	さ		<u>"</u>	$\equiv$	~	$\overline{}$	3	Ê	0	<b>₹</b> :	ご	3	无	<b>王</b>	<u></u>	29	<u> </u>			



### (290) 子には噺のあわぬふりつけ

か。それにしても解釋に苦しむ句だ。 秋の屋=「ふりつけ」は、舞踊の振附の事

供には否込めない。手をとり足をとるやうに 持ちであらう。 であらう。口で云つてやつても、さつばり子 して、やつと、どうやら吞込ませると云ふ心 魚―子供に舞踊の振附けをしてゐるの

で、結局、たつて教へねばならぬのだ。 省 二=言ひ聞かせても納得出來ぬ「振附

## 鳴聲は葎の宿のふとり牛

太り牛の對照は、なんと平和な境地を描出し て、その中の太つた様子を察する。葎の宿と て居るではないか。 省二=葎の家から聞えてくる、牛の鳴聲に

であらう、と其姿を看ずに想像するの敏。 秋の屋=鳴摩が太いから、大方肥滿した牛

逞しいものと對照した點が、句の中心であら 魚―蛭子氏説の如く、谷弱なものと、

## 鉢たゝきたゝき仕廻へは鉦の音

たゝき、一人三人つれてもらたひ、かけ合て も諷ふ。」修行を了へて歸れば、鉦をらつて ーー「かれが修行は<br />
瓢簞をならし、<br />
鉦打

## 研 (十九)

誦文を讀むやうである。 佛をして、それが終ると鉦を打鳴らして、諷 秋の屋―空世念佛は、瓢を叩きながら踊念

に變る處に、興を感じたのであらう。 魚─賑かな心持ちが、俄に靜寂な氣分

## 曲たいこ若い姿のか げぼうし

打は若者、笛方は年寄などであつた。その影 法師がらつる。この下五に因つて句が印象的 (293) 1=太皷の曲打は面白いものだ。太皷

八兵衞といふ男が、これを演じたのを記憶す 秋の屋=曲太皷といふのは、昔の太神樂の

に躍る有様であらら。 魚=異常の手振りが、背後の壁面など

## (294)日の覺た縞を着て居る名代乳母

省 1=名代乳母丈けに、派手な縞柄を好

のである。 から、目の覺めるやらな仕着せを纏らてゐる 秋の屋=主家のお覺えめでたい乳母である

句意は前説通り。 東魚=「目の覺める」とありさうに思ふ。

蛭 森 梅

=

(295) 吞 たい折 に見へめ丸薬

必要の折り一寸見當らなかつたりするものだ 「丸薬」で句の輕味を出す。 省二 = 薬などは大切に仕舞ひ過ぎるので、

(296) 子にふろしきをかける日蝕

から、その時には空から毒が降る、と昔の人 秋の屋=日蝕は、太陽が病に罹るのである

公」といふ句を、換骨奪體したものであるが

にも、和やかで、自然におかしみを感ずる。 **魚**=面白い句だと思ふ。風呂敷がいか

(297)つけ口は鳥に成ツても憎かられ

嫌はれ憎まれる。よしそれが鳥の如きに於て 省二=針小棒大になり易い告げ口は、人に

魚=「鳥に成つても」は「鳥類にありて

本 秋 0 魚屋

自分のいれて置いた處に無いと、一寸探しあ れが見當らぬものだ。 くむものである。丸薬丈けに一層面白い。 秋の属三大急ぎに物を探す時には、仲々そ 魚=實際、私などは始終經驗してゐる。

の日には毒が降るなどと云つた。 子)。日蝕をみれば目が潰れるとか、又、日蝕 ||=「赤子に笠をきせる日蝕」(金砂

は迷信してゐた。

秋の屋=所謂憎まれ鴉である。

も」の意であららか。普通では一寸可笑しい。

うれしさの袖も涙の 大あくら

んで居る、と云ふのであららか。 省 二=大胡座をしつゝ、嬉れし涙にむせ

秋の屋=全然不可解。

座で涙にむせんでゐると云ふ處に、大丈夫の ところであらう。 面影を暗示してゐる點が、この句の選まれた 魚=前句で場合が想像されやり。大胡

みのわの言葉問ふに及は

求無心にきまつて居る。 からの言葉なれば、腹の子の主への色々な要 くなつて箕輪へ蟹居させ」て産ませる。箕輪 省二―花魁の體に異變を來すと、

といふ事を、古老より聴いたことが有る。 原詞といふのを罷めて、普通の詞を使用する と云ふ意にとれるが、どうも充分わからぬ。 ずとも、直に常人の日常語であるから、分る 秋の屋―花魁や禿が箕輪の寮に來ると、 角─秋翁のお説を基とすれば、問返さ

(300)隣の反吐にあ かす鷄

ない。拙宅隣りの鷄は、サイレンがなると、い 上であらうから、隨分叩喩されて居るわけだ。 つも騒出して聲を上げる。この反吐は泥醉の 省 ニ=奇拔な句だが、實際なしとも言へ 秋の屋=此れは其角の「曉の反吐は隣か郭

想を及ぼしてゐるのであるが、この句は實際 前の俳句よりも甚だ拙いと思ふ。 ありえさうな處に、おかしみがある。 角─其角の句は、時鳥の血を吐く事に

(301)の雨は殿をかろしめ

の雨で、遂には城を傾け國を傾ける。恐る可 秋の屋―愚なる殿様を輕しめる。愛妾の涙

角=贅。「かろしむ」でなく「しめ」とし

であり、説明的になる。 た處に味がある。「しむ」なら、餘りに叙事的

も流れてしまふ。お芝居の殿様の如く、ノッ も涙にかくつては、「漏り」位ではすまず、國 り」で、女は色々の武器、道具を有するが中に ペリとしてゐては輕しめられる、隙がある。 省 二=通り句「傾城の涙で蔵の屋根がも

### (302) 旦那寺春の道具に遺はれて

遺はれるの験。挿花の會や俳諧の會にも便用 秋の屋=-且那寺の座敷などを、花見の爲に

俗に云つた寺などを思出す。彼處は庭を開放 られたりするのであらう。日暮里の花見寺と して異れたものである。 魚=-花見や野遊、摘草の休憩所に借り

その例多し。 どがあつて、見頃には座敷が遣はれるなど、 省 二—前雨解賛。 - 又寺域内に櫻樹な

## 笙の師へちらり (と御扶持方

時に些少の扶持米を遣るとでも云ふの験。 秋の屋=「ちらり~」と何をするの験。臨 魚=「ちらりく」は、たまに、とか、

僅に、とかの意であらうが、 句意は充分解ら

ニ=秋翁説の如く句面丈けではとれる

### 若衆の 肘 0 袖 쏲 1= 出 る

笠と連用され、又袖笠雨肘笠雨ともいつて、 の先が出た。若衆の艶かしさが漂ふ。袖笠肘 二一<br />
俄雨に袖で頭を蔽ふと、ちらと肘

秋の屋=漫艶な姿が聯想される。

出てみえた姿に、情趣がある。 魚=若衆であつて面白い。 肘がこぼれ

省二=五本松が一本~~枯死して、残つた

崎でぬれた傘瀬田でほし」で、唐崎の一ツ松 どこにも有るから、指定するには前句がい 樹があつて、「一本の松におぼろや雪の曙」 多く詠む。=伊勢桑名本願寺村に、奇代の大 やもめなり」。「ぬれて」に重きを置けば、「唐 會には繪が載つて居る。「唐崎も麻布も今は る。 莫味を覺えさせられる。一本松と稱するは、 として通用はする。和歌では「一本の松」と 一本の雨に濡れて居る情景は、古木の姿に寂 江戸では麻布一本松が有名。江戸名所岡

がある。「にも」は唐崎があつての事である。 中仙に「麻布にも松一もとの夜の雨」と云ふの は唐崎の松と考へて差支へないであらう。橘 松の様な、姿を思はせられるが、矢張り此句 つた姿、例へば關口の芭蕉庵にある五月雨の な姿の松は聯想しにくい。もつと高く聳え立 東魚=一本松といふと、何だか唐崎のやら 秋の屋一辛崎の松と治定して宜からう。

## 紙雑の物にかまはぬ立すかた

(306)

のは腰が曲るなり。」これも一種の立姿だ。 輕な立姿だ。之と紙雛は玩具の用に供せられ たもの、それが節句川となつた。「紙雛も母 譯すると、有りの儘とでも云ふか。其儘な氣 秋の屋=千代紙を用ひて作つた、 省二一「物にかまはぬ」は、こだはらぬ、意 雛らし

にある。 はどうでもしろの姿なり」が、露丸點万句合 でユーモラスな氣分もある、面白い。「紙雛 魚=無造作な中に趣きがある。 寫生的

## 片折戸立ても内は生さかな

(307)

は生魚が上る、と云ふのである。 外見は世捨人の閑居のやうでも、その食膳に 秋の屋=嵯峨野の奥の小督の隱處のやらに

響くやらに思ふ。 魚一「立ても」の「も」が、理窟ッぽく

**燒の音などは、そぐはぬ思ひがする。だから** チリ位にして居る。 省 二=私など病弱の閑居暮だから、スキ

## 目かねても今は暦に齒か立す

齒が立たずと詠んだのである。 は、能くよむ事が出來ぬといふので、夫れを 秋の屋=目鏡を掛けみても、伊勢暦の細字

> 山淋し過たもめでたくて」(年ごもり)などか 全く氣持のよいものでない。况んや「三輪の

ら察しても、三輪山では思はず振り返りみる

が目につく。 魚=目と歯を對照さしたやらな、

事である。

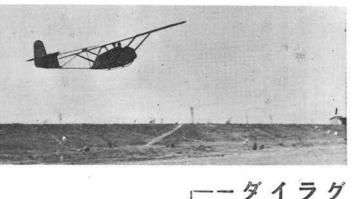
1=獨立句としては、内容もつまらぬ 三輪の山夜の女にふりかへり

と、變化などではない歟と、顧みるとであら となく物凄いので、其邊で夜中に女に出合ふ 秋の屋=三輪山は苧環の神話もあつて、何

と不氣味に見やる心持であらう。 省 二=淋しい處で、夜中女に出逢ふのは、 魚=丑の時詣りでもするのではないか

玉 川(前號)正

三三三三二三頁 四四一三-二一三二行四〇 湧挾表音 豆灯にメ 腐 附 メ誤 湯挑表メメメ正 て 付



### ラ ク

### 見學 柳

持 名 金

廿二日迄に申込まれたい。 乞ふ。(準備の都合がありますので出席者は 川柳を作られない方も誘ひ合はせて御出席を る川柳吟行會としました。時節柄、航空思想と スポーツ精神涵養のため勇躍参加されたい。 國飛行協會主催のグライダーの講習を見學す 聖戦一周年を記念するため本社七月句會を帝

七月二十四日(日.午前十一時卅分 上六、大軌驛內 本社旗の下に集合

B

場 盾津、陸軍飛行場

題 スポーツ一切(三句)森

東魚

選

兼 命

**壹圓**(乘車券、バス券、辨當) グライダーに就て 教官 一等 滑空士

大軌乘車券不要の方は七拾錢

大阪市西區筑前橋電停前 昭和ピル内

誌

#:

社

電話土佐堀三三三三•八一六三•八一六四 幹事 河花 繁香 大客 變人 鮎美 豆状



### 買かつく夢 の句の解釋

生方敏 郎

りですが、次に武玉川研究をよ り、例の「永き夜の」の欲を書 代には誰もマジメに之を見たが 買手が付くのです。初夢の中で 皆さんは買擔ぐとお讀みですが 解釋は私は皆さんと遠ひます。 251二日つくいて買かつく夢」の す。併し今度の號の第三頁三段 は時々拜讀大に盆を得て居りま み又一筆かき度く成った。此項 では皆自分で紙を折り頸船の形 賣りに來ましたが私の田舍など いて質船を折り(東京ではお簪 徳川時代のみならず私の少年時 も一富士二たか三茄子の如きは 私は買が付くと讀みます。夢に に感心してハガキを書いたばか 〈とて明治三十三、四年迄は 今川柳雑誌を讀み移動座談會 目の夢でせら。 に使はれて居ります。

> 3 物語」に出てふる北條政子が妹 と信じますが、之は勿論「曾我 で皆さんは大方膝をポッと打ち 來たものです。 賴朝を愛人に得たといふ話から の夢を鏡を與へて買ひ取り、源 「成程」と破額一笑せられる事

があり之も私なぞ今以てその迷 て吉夢を見その夢を人に語ると かは知らず、兎に角二日も續い 信から脱脚しません。初夢か何 有る事は三度有る」といふ迷信 「是非その夢を俺に賣つてく は足利時代といふ事です。そん 作者も勿論不明ですが學者間で の記録にも無く、多分「曾我物 が、多分承久記には無いでせら 語」に見えてゐるのが文献とし な詮索は問題外として、兎に角 て最初かと思ひます。まだ私は 「曾我物語」著述の年代は不明 「承久記」を通讀してゐません

之は皆さんの解釋の如く第三晩 るで、「第三晩目の夢を俺が見 か、或は又二度ある事は三度あ ひに出た、賣りに出たと云ふの くと云ふ言葉は、今日でも普通 は相場の言葉、品物に賣手が付 たい、俺に賣れ」とて買手が付 二つとも買手が付いたと云ふの すが、買かつぐといふ言葉は、 偖、夢を買らと云ふ事は、私 たか、之は一寸不明ですが、 いぞ關東では聞きません。買 買冠る」といふ言葉はありま 但し、二日(二晩)見た夢を の如きは其數も非常に多いので 根據としてゐる物のみで、戲曲 にも此の二著に盛られた挿話を 弟です。小説にも戯曲にも川柳 上の人氣者は九郎義經と曾我兄 知識とし常識としたことは確か 時代の民衆、民衆のみならず恩 書かれた「義經記」と共に徳川 もので、矢張り同様に足利期に 民間に流布されたことは非常な 平家物語には殆んど無く、源平 です。從つて德川期に於ける史 者迄此の二書を以て源平時代の 盛衰記には極めて少々有り、吾 頼朝と政子に關する記事は

此話は源平時代にも鎌倉時代 的だつたのです。此の挿話は日 で政子が妹の夢を買つた、吉夢 知識に成つてるものは「曾我物 に讀まれて居らず、 は寧ろ日本外史から多く此種の あります。我々程度の年輩の者 を買ふといふやうな考へは一般 語」の中にある挿話です。それ 本外史の中にも取り入れられて 一般民衆の

ではないかと思ひますが貴君の が付く夢」と解釋した方が自然 お考へは奈何ですか。(五 何にしても、此の川柳は「買 · ૠ

年時代に繪本でみたやらな事に

挿話を知り却つて曾我物語は少

なつて居ります。

### 川柳つれづれ

と云ふ買手が付いたのです。

此の曾我物語が徳川期を通じて

なつた。草疲れてしまつたのか さつばり左様な論爭を聞かなく の解決も見せなかつた筈だが、 つた筈だが、そしてどれも凡そ か本格とか、いろんな問題があ 由律問題だとか、または革新と れぬが、柳俳無差別だとか、自 寡聞にして知らないのかも知 奥村 丹 治



も明治大正期でも吾妻鏡は一般 妻鏡には澤山あれども徳川期で に理論が活潑に行はれやうとし のか、原因はとにかく一時柳壇 たそれだけの基礎勉强が足らん

ました。親の命令で私たち子供 にして)之を枕の下に入れて寢

が説明いたす迄も無く、此一言

壇無風狀態である。俳壇では定 はいさ、か淋しい気がする。柳 的情熱をもつてほしいと思ひ、 私はもつとノへ川柳家にも作家 柳家は飽きつぽい。根氣がない 揮してゐるに比べて、どうも川 的より脱して本格的に研究もさ 型非定型や、無季俳論等が感情 ところその根强さをいよく一發 れ競表もされて、論のおもむく 又川柳學究が輩出してよいと思 た氣配がいつのまにか消えたの

拶はないと思ふ。「儲かりまつ 蔑する。私はこれほど卒直な挨 他國人は「儲かりまつか」を輕 して酒を喰らふ輩をむしろ輕蔑 して、他人のふところをあてに 空々しい挨拶や言葉の受渡しを かーの問者决して守銭奴でない 大阪人の挨拶の常套語として 儲かるかあかんと八百屋同 かほる

意味の人間表出に成功してはゐ ない。むしろ俳句等の方が深い 句も短歌も亦人間であるに違ひ を書いて未發表のまゝにしてあ 共鳴した文章であつた。私も未 柳だけが人間であるのでなく俳 つたが、讀み返してみると「川 熟ではあるが一度「川柳人間論 は人間である― ふあらすと六月號所載「川柳 - 紋太」は近頃

間論は未完の樣でもあり、若し のか。それを詮じ詰めたいと思 ないか。それにも拘らず川柳は の望外の喜びとする所である。 この小文がお目に止つて前述の してそのまゝ尻切れとんぼに終 ふ」と云ふ事を書いてゐる。そ 持ち――これはどこから湧出る 疑問にまで論及されるなら、私 つて居る。幸ひ紋太氏の川柳人 人間であると特に强調したい氣

川柳的効果を發揮するのは專ら その形式に於て短歌の方が、そ その本道に入るのはこれからで 重とか悲壯とか、全身的な感激 柳の二つに分けて、川柳がその とかを詠ふのに無理があつて、 でもないが、どうも川柳では莊 々するのは時期尚早の感がない またねばならぬし、今之れを云 あり、すぐれた川柳家の出征を 後者の方でないか。事變川柳も 事變川柳を前線川柳と銃後川

な様に思ふ。 の叙法に於て俳句の方が、適切 人に怯ぢ暴れたつ馬は小柄に

兵はすがるがにして行きにけ り(短歌一例

兩眼を射賞かれし人を坐らし

があるのではあるが、嚴肅なる 川柳的觀照があり、川柳的表現 勿論川柳には川柳的素材があり 等に至つて右の感を深くした。 む(俳句一例 吾々讀者を相手に 立つまい。

アイロニイ、 西洋の言葉だと、

ユーモア、

フモー

、るものではなく、笑ひそのも

た。手帛を卷き締めた兩手は小

サタイヤー、 地口、輕口

川柳の事を言はし 好家位の立場で、

> 然し川柳が機智、譏刺、諷刺、 跡は絶ち難いものに相違ない。 性であるなら、なかく、狂句の た如く、日本人の駄洒落が國民 本人には駄洒落しかないと評し 合衆國人にジョーク、そして日 イット、英吉利人にユーモア、 である。或る人が佛蘭西人にウ 如きは狂句に近いものがあるの

眼

鈍 36 鷲 高

はあ

段取

にな

(3)

10

て貰つたつて肚も

踐に移すかに考へ及ぶ時、 困りはせぬかと思ふ。 **戦闘に直面して如何にそれを實** 少々

の境地に期せずして到達するも 柳らしく意識しすぎた結果であ 征される川柳家諸兄の前線作品 でゆくならば、そこに柳俳一如 を期待するや切である。 つて、謂ふ所の近代川柳の叙法 けれどこれは餘りに川柳を川 出征された川柳家並に今後出

輯されて、前線へ或は傷病兵士 この頃戦線慰問川柳句集が編

學生である。然し

だけれども、昭和の川柳が、

僕は川柳家でなく

ら立

つて

く相違したものである。

然し、現在、ある派の川柳の

川柳と狂句は、發句と俳句の如 位の事は、知つてゐる。全く、 狂句と區別しなければならない ては、まだ~小

僕は川柳家とし 笑ひの哲學

考に聞いて置いても損はすまい

て句作してゐるのだから、含

ル等と相當したものであるが、

のにある哲學、批判がなければ

川柳で、慰問が出來ないとは思 柳を墮落せしめ、又それを容認 句や低俗川柳が、容赦なく混合 手にゆだねられたいと思ふ。編 勿論企畫には賛成する者である に贈られてゐるのを耳にする。 耳にした。慰問の名に依つて川 やまられた選句眼に依つて、狂 者が純川柳家でないために、あ へない。(十三、六、 い。ほんとうの川柳で、吾々の するのは川柳のために正當でな するのを危惧する。現にそれを が、必ず句集編者は純川柳家の 二十二

> 研古 究句 尻 馬 石 柳 稿

石

卷中に、面白い記述があつたか ら追記する。 達輕捷法の一として上述し來つ を繙いてゐたら、これが九十九 靜山侯の著「甲子夜話」の續篇 たが、例の川柳愛好の大名松浦 一閥萬能の鐵壁時代に於ける榮 徳川時代の杓子定規式の格式

云者有り、唯寬政丹の法今絕え も奇薬にして、人或は其効験を たるを歎くのみ。 「或人賣藥の功能書を示す、最

> 中包金五十兩 名出世樂といふ

屈にまかせさまざま養生いた し、即功藥力にて、しるし神 の場へ小包を兩度づゝ用ゆべ すといへども印なき症には望 寄合或は小普請入にて段々退 事妙なり、たとへ家督後又は 此藥諸病に用ひて功能ある

、何となく評判あしく札付と 用ひて、折々時候見舞として なつて手の盡たるには中包を 相應の音物を送るべし、かな

氣本復すべし。

削除せられた句の の改革で旣刊中の「柳樽」集中

の徴象で、

おぼえ

**小包金** 十兩

日本で、庶民文學として發生し 然し笑ひといつても、 の伴ふものであるかも知れない かと思ふ。但し川柳は又、笑ひ 性などは排撃す可きものでない 隷文學としての卑屈性、ヒガミ らいふ江戸時代の如き町民の奴 なくなるから。たど川柳が、さ 持ち出すと民衆は川柳に馴染ま ない。何故なら、文學や藝術を 學性などと論ずる事になると或 柳が、六ケしい藝術性とか、文 るが故に、唯一の民衆文學とし ンルは解體してしまらかも知れ ひは川柳そのものゝ、文學ヂャ て發展してきたものである。川 たことは、事實であり、これあ クスグリと丈で言つて仕舞 嫉妬性、諦觀性、投げやり 單なる滑 笑つてゐるのである。その時の ならない。ベルグソンの「笑ひ に固く握りしめてゐる手帛をみ めた拍子に、不圖、婦人の手元 たので、それを拾はらと腰を屈 使つてゐたが、先生は床へ落し 季節は夏の眞晝であつて團扇を た母親の愁嘆塲を豫期して會見 含んで。先生は、それが却つて 事を語つてゐる。而も微笑さへ なつた學校の先生の自宅を訪問 な笑ひを解しなくてはならない の哲學」がある如く、意味シン 怪訝に思へた。一人子を亡くし したのに意外にも、 人は先生のまへで平氣で息子の した。卓子を隔て、腰掛けた婦 人が、死んだ息子の生前世話に 芥川龍之介の小説に、ある婦

> て賄賂は行はれた。例の寛政度 として、榮達出身の一方法とし と、徳川治下は殆ど公然の秘密 音物、手土産、袖の下・ らず近き中に功能あらはれ病 鼻藥

〇役人の子はにぎくくをよく

は其の邊を能く穿つてゐるは

みでもなく、多くは一種の權勢 賄賂は必ずしも利慾の發露 権勢なき處には賄賂

生はその時始めて、この婦人の さく、ぶるしく震へてゐた。先 のみ判るこの笑ひが、川柳にし 西洋人には判るまい。日本人に 説の眞意が判らない。恐らく、 悲痛な感情を掩ふヴェールだつ る。この婦人の笑ひの底には、 心情が共感したといふのであ の土になつた小泉八雲はこの小 たのだ。日本に長く住つて日本 れを知りたいと思ふ。 て、どうなるだらうか。 秋風の中で乞食に拜まれる 僕はそ

ららと思ふ。 ひの哲學を持つた一つの例であ は全然違つたものであるが、笑 この句など、前の小説と意味

かの婦人は



頭かされる。 中瀬勝太郎氏の論斷には一寸點 は絕對に起り得ないと論ずる 徳川時代の賄賂秘史」の著者

### 武蔵の切抜き

本葉

光

で數多くの名句を残しておられ 蔵」の作者の吉川英治氏はその る。その中で、 昔、東都の柳界で雉子郎の雅號 朝日新聞の夕刊小説「宮本武

る者の誠實の言葉である。 のではない。小生の如く、小説 讀めは、人間修養の青年劍客、 讚熱は素晴らしいものである。 をして人生の縮圖として愛讀す そのま」の名士の言葉を借りる れは何も新聞社や雑誌社の廣告 て、讀む人を敎へて吳れる。こ 武蔵の魂は、現代の呼吸をもつ 人ならずとも、一度「武蔵」を が、豆秋氏の「宮本武蔵」の愛 實際、豆秋氏ならずとも、 と云ふ句があるが爲めではな 此の先を考へてゐる豆の蔓

味を通して愛讀する小説「宮本 でも、小生の病床へ郵送して慰 感謝して、此の切り拔きをまと 武藏」は實に大きい教訓である る。吉川英治氏の柳人としての さめて下ださるのは豆秋氏であ を待ち遠い様に、地方に出張中 切り拔いては三四枚程たまるの 心がまへの熱筆と、豆秋氏の情 その「武藏」の小説を毎日く たまらなく有難く嬉しく

# 柳

ほ ۷ 笑を忘れた様に守衞老け

雀

强盜が見てゐるやうに

金庫閉

8 風

> 本職は保險の勸誘をやつて居る 朗かな中々世話好きな男が居る

僕の家の近處にひと云ふ頗る

庫 生.

毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢 川柳を作る人愛好する人の必讀誌

東京牛込區揚塲町八川柳俱樂部社

俱樂部

代表誌 川柳草薙

部一〇錢 一年一回(郵稅共)

んだが、肝腎の本職の方は一向

子

から守衛に拾ひあげられた彼だつた。彼の人生も既にゴ 百姓が嫌ひで巡査を拜命した彼だつた。 巡査を退めて

回轉符號を幾つ廻はして幾つ戻した。

その上にまだ人が

金庫は音もなく閉ざされた。あたりに氣を配りながら

見たら蛙になれミ云ひたそうだ。

1 ある

素晴らし

い儲けを藝妓聞

くは

かり

文

洞

横額ではあるまいかミ作者のメスは鋭い。 ガンヂーの痩身矮騙、 超世間的な顔孝こそ、 羊

飛ぶ。閨秀作家もそれを問題にされる間が花だ。 處女だ。半處女だ。イャ非處女だご頻りにゴシップが

背の低い 人は日本大使 なり

葉

小村壽太郎なんかい、例かも知れない。 ヒリリミ辛い。 威容堂々ご云ひたいが、背丈ばかしはごうにもならぬ まさにその通りだが、 句には一脈の滑稽 山椒は小粒でも

ンドバ ツグ迷へる心パチつ かい せ

グをパチつかせる女心があり!~讀める。 買はうか、買うまいか。要はそれだけだが、 ハンドバ

生 路

郎

早

合 點

麻

(N)

ールインに近い。

プ ロフ井ー ju ガンヂ 似て羊

ゴシップへ處女であつたりなか

b

何十萬掬ふ」こいふ話をよく聞かされるが掬ふたのか摑

お座敷に侍んべつてゐるこ「こゝでピンミハネたら、

つた

ないのかも知れない。

が藝者だ。掬つたが最後わたしたちを相手にして下さら みそこなつたのか、おこほれを頂戴したためしがないの

味がある。

のに過ぎぬ。それも書生の代筆だ。ああ。 氣がしたが、 大臣から賀狀が來た。急に自分が偉らくなつたやうな 考へて見れば、こちらから出したから來た

七日過ぎ出したから來た年賀狀

平

折出入りして居たらしいがOも

只の家とは隣同志の事なので時

T家は若夫婦の事故、あんまり

お 困りでせうご世間は言ふただけ

詩

分の外にはない。最後は自分だ。自分の努力だ。七轉び セルフヘルプだ。依頼心を捨てよだ。自分の味方は自 影 つたが、丁家は非社交的の家庭

Oも聞いては居らぬらしかつた 書き忘れたが〇家とT家とは同 故果して何時頃、生れるのか、

ないらしいが、苦勞人丈けあつ

川柳きや

4]

よく飲み、生活はあまり樂では

お留守で、よく遊び、よく話し

發行所 草 薙川 四名古屋市南區八熊町寺田

柳

肚

て、少しも生活に隙を見せない ふ、若夫婦が引越して來た。何 四月頃この〇家の隣に丁と云 每月一日發行 一部廿五錢 六八 川柳きやり吟祉東京豊島區高田本町二ノ一四 菊 判 每 號 七 十 數 頁

でも市内某鐵工所に勤めて居る

とかだが、職に似合ず極くおと

京都市西木屋町四條下ル 京都市西木屋町四條下ル 社

川月柳刊 部十二錢

青森縣黑石町 川柳みちのく社 年一圓五十錢

近所とも口敷をきかず、交捗も の後は勤めの關係上か、あまり 近處へ挨拶に辿つたのみで、そ なしい夫婦で、引越して來た時

大阪市此花區西九條二ノ六二 部廿錢 味 年 草

のやら分らぬ様な存在だつた。

少ないので、居るのやら居ない

大正川柳」第五一號及び第五 大阪 媛 柳 社

八號相當の代價にて譲受けたし 川柳雜誌社內 B B 生

繁々とは交際せぬらしい。

柳

『ス・フ』九月十日課題「 娘 』八月十日

らく姙娠八九ヶ月位でもあらら

君の腹が段々目立つて來た。恐

ところが近頃になつてTの妻

か。袖や袂で隱し切れぬ様にな

明紀の事)渓者麻生路郎氏 用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と

秀逸數句に薄謝を呈す 三ノ三六 麻生路郎氏方大阪市西成區玉出本通

6

めて綴り記念にしたいと思つて

柳書廣告、その他柳書廣告、その他柳書廣告、その他

### 法律を 人知つて、 角が立ち

律は伺處まで行つても割り切れない。解決は死あるのみ て何になる。徒らに顔面筋を硬化させるに過ぎない。 民法第何條が何を約束してゐやうが、それを持ち出し ス嬢の嘘空いたのがすぐきます 洋 鬼 法

身の廻り眩しく 教祖御 簾 の内

直ぐまるります!

ンミドアを閉めたバス嬢の聲は朗らかだ。

「すいたのが

滿員、

滿員、

次ぎのバスも次ぎのバスも滿員だ。パタ

こうなされませこ死人の掌を合せ 教のお直婆さんこなる。近くは人の道教團の三木某。 祖を天日に曠せば、天理教のおみき婆さんこなり、 教祖
ミいふも
包装の
美であり、
偶像の
價ひである。 茅 蘆 敎

「隨分三苦勞をなされましたね。もう極樂ですよ」三死 +

つて、南無阿彌陀佛々々々々々の

者に對しては敬虔そのものだ。靜に掌を組み合はせてや

### 都 會人 工 ス カ V 1 ター でも歩き

し、一歩先んじるこミによつて闘争意識を満足させてる 味を指教してゐるが、都會人はこれに反し常に他人を排 る。時代は移るの感が深い。 

看護婦の戀か疲れか 窓 に立ち

秀

詩だ。誰か知る看護婦の胸の悩みを。 夕燒け、白衣、 限下の綠樹これだけでも、 既に一篇の

病人の方が氣にしてゐる晦日

出

氣ではやりきれまい。いつそ死んだ方がましだこ病人は 云ふもの、聲に力がない。 云ふ。「なあにそんなここは心配しない方がいゝよ」こは ガッチリ働いてるてさへ赤字の連續だ。だのにこの病 路

病氣には勝てぬ横綱ばかりゐる

光

に並んでファンを淋みしがらせる。 んでは、押しも、投げもきかぬ。休、 八間は病の器ミいふ。幾ら横綱でも、病氣ミ四ツに紅 休 休 休が番附

> ふ共用のものなのだ。 じ棟で壁一重、井戸は半分宛使

彌

まつたのはよいが、 殊に姙娠八九ヶ月の妻君ーと云 命やつて居る。ハッとしたO氏 んだな」と一途に早合點してし ふ先入主の爲「テッキリ生れた 聊か慌て者だからたまらない。 も米磨ぎを主人公丁君が一生縣 も妻君がやつて居る台所仕事而 き間から覗いて見た處、何時で くT家の方を井戸のところのす 或日〇氏別に悪氣あつてどな 例の世話好

創刊十五周年

蘭 華

たのだからお祝ひを上げやう」 け「Tさん方にお子さんが出來 きを發揮して、近處隣へ誘ひか 京・姉・鉄・藤本方

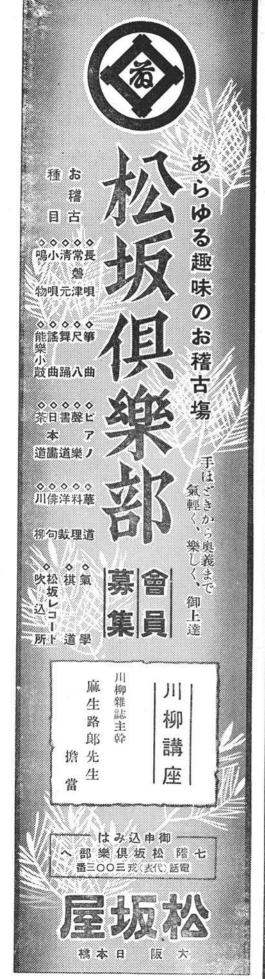
仕來たりの一戸より五十錢宛

を集め、計三圓を御叮嚀にも包 んで早速の氏代表格で、T家へ

りて來たT氏も歡びをうけて鳩 ヒッソリ閉として、出産のあつ お歡びに持つて行つた。 た家とも思はれず、二階から降 ところが丁家の方は家の中が



散恥をかいて慕 で解消、一同口あんぐり〇氏散 だとの事が分り夫婦喧嘩も笑ひ 君が、米を洗つて居たのをO氏 が見付けた末に、斯らした始末 まつて起きぬのでお人好しのT 妻君が怒つて不貞腐つて寝てし が豆鐵砲を食つた様な格好をし 細な事から夫婦が喧嘩をした末 で、よく尋ねて見ると朝何か些 て居る。あんまり様子が變なの



### in les un Singlin IIMIII AIUM

### 作 近 柳 郎路生麻

it

ごう こても間 そ 借 失 消 筆 長 いも 入 促 0 業 防 金 L 0 0) 車 0) 中 が T 手 送 下 音 1= 8 ŧ 紙 會 0) 1-别 片 3 か 出 は 5 嬉 F te 親 な 世 が 5 L 1= 5 3 4. 2 町 3 足 す 0 3 5. 駈 で ŧ 馬 破 氣 U 0) 若 7. 0 鹿 C T 5 る 3 未 見 騒 走 22 15 な な 3 0 X 人 3 0 3 0 大獎娛縣 小石 松縣 同 曲 牌 同 同 同同同 同同 Щ 利 しさし 孝

長 唐 吸 期 ょ は 戰 3 12 龍奈 良田縣 嶋 同 Ш 翠 米

露

<u>ー</u>っ

慌

T

T

落

to

地

1:

金

貯

3

奉

公

ŧ

0

雨晴

カ 1 '5

2

<

帽 あ T

0

數

居 3 同同

1= 4. 0 蠅 te \* 起 1= < > 道 हे 慶 153 同 同 葉留路

女

历

囲 息

か

す

謠

が L 1=

1

S

S

S

1

地下

鐵

>

0

が

111

0

底

匹

12

18

凝 5

5 あ 2.

1

ス館 れに 80

目

「會ひた

4.

人も

ii. 趣 れ ば 0 味 1= 薩 泡 手 見 1= 0) 2 U 買 語 は 1= 0 3 12 今 治 同 長 同 文 麻 天 勇 鬪

培

法 か

子を

くし

4=

6

3

か

探

す

般

若

同

3 節

見 搏

> 未 口 直 漫 兩 塩 豆腐屋に 赤 召 腰 叶 踏 情 6 3 眞 褪 集 < 畵 辛 切 實 練 腕 戶 19 れ 似 あ 家 令 Z 兒 0) 6 に 4. 戰 1= 3 te が は 受 荷 颤 + 0) 閥 te 0 箒 位 3 寫 0 2 開 T 重 泣 U T Ŧī. 3 物 か < れ管 眞 U 4 來 3 ば 荷 か 煙 子 ~ 子 祉 0) 专 1= 80 ケ す る 80 T 6 \$ は 草 供 te 女 女 ち な 年 長 ぞミ 馬 な 0) か が ~ 12 妻 2 蓟 は 0) E 3 Ł ^ 9 食 1= 3 瞳 L U 图 取 してし 聲 言 夏 び 齊 外 ス む N 疊 かい 館 圍 U te 屋 T が te 眉 力 12 #6 4. 0) 默 入 遺 征 張 か T 8 な 見 82 12 び < 來 0 9 れ L せ 聲 味 3 0 0 3 3 大 大 下 神 阪 Ш 阪 同 石 同 同 古 同 同 同 同 司 同 楊 同 [7] 村九呂平 寺謙 H 井 沐 南坊 Ξ 天 南

書大陽の子

クシー 秤 心 1: 1= か 朝 がゆ 6 掛 0) 禮 3 U 亦 40 た狀 0 か から 1-0 1 來 秘 t な T 80 0 3 祭 T 相 0 3 3 色 な 合 男 0 3 大 阪 同 同 田 中 風 葉

> 蝶 征 峠

ŧ 粽

12 は

行 器

<

妬

1-

貨

1

T

貰

S 嫉

な

6

大

阪

村

春

月

te

す

店こ

母

川

1=

卷

4.

T 父 望

見

せ

半 洗

白濯

妻

1=

背

0)

子

無 所 1-

如

0) 0)

1111

茶

屋

木

0)

H 水

樂 te

浮 3

津石

幡縣

島

みどり

葉

芽に

套 挨 靴

努

カ

金

te

貨 T

0 歸

れ から

> ۲ t

飩 添

0

宮長

野田縣

井

小

ちごつ

ŧ

鈗 L

後 ょ

0) 1=

汗 111:

か

あ

柏大

原府

宮

岡

公

子

0)

眞 to

夏

0)

批

ŧ

寢

T

3

な

0 0

拶

生

\$

5

82 T

事

曜

をビ

ク

3

遁

道連 呼 初 血滿 動血 萬 患 拾 釣 あ 日暇 IJ 信 員 者に な t 0 10 È 緣 圓 圓 告 0) 4 蚧 0) 心 の車 れへ 肌 カ ま 目 か 0) 18 0) 0) 見 智 S. 書 が 1-7 すこ す は 5 は 寧の 夫婦ご見られたて 戁 塲 -) お 見 市 4. 0 誠 ごま 新 ^ 1 3 に 所 塲 鼻 U 儲 た 妻 元 札 釣 聞 5 る ン L 證 粗 1 0) ž 82 が チ 探 0 初 1) L 世: 窓 < 書 行 カ 諛 子 姿 \$ 末 早 te L 陣 12 HIII T な な椅 な 0 1 字 を 0) た 變へた本パ 0 4 T 0) 困 0) 叨 τ 0 3 字 ネ 見 乘 ダ な カ 例 3 3 子 が 子 高 情 П 1 ン 4 付 4 ["] 0 ie 3 < 朝 が te ス te < 話 をけ 儲 1 1 40 U が 0) 送 吳 3 構 續 3 下 商 2 0) \$ 6 0 ナ 5 \$ 2 席 駄帽 人 tr え 客 去 1 () れれれ 道 7 竹廣島 原 原 今 兵庫縣 大 尼 尼 崎 治 崎 阪 酒井美 富 酒 天 同 同 黑 同同 同 同 同 同同 本 77 岡 井 i 4 芳 鴨 巨 和夫 風 府 人 泉 路

死

C

3

3

下

關

多

田

市多

櫻

1=

寢

0)

階

風

が

吹

专

通

票 臨

飯 石

日 婦

ŧ 丽

食

T

無

事

尼

尾

寄與

史

護

下

け

る

留守

番

te

驚

か

す

鳴兵

**康** 

北

M

春

巢

職

夜 父

勤

眼

か 1=

U

終

0)

J:

海

\$

15

尼

崎

南

路

弔

6

意

5

0

タ

才

E.

ス

١ \* 3 80 す 1

今

治

田

窪

石

鐵

はす父

子 8

供 5 鏡

が

動 電

\$ 話 は

過 鳴 U 5 如

新臨夜積干

のし

1

窓

呼

吸

が

あ

3

サ國

E"

ス

0)

氣

0)

毒

が

0

T

見

大

观

山

本

葉

光

言

に

T

結

ば

れ

3

初

對

同

物

に

氣

te

使

は

せ

3

植

木

棚 3 面

重

I.

0)

煙

太

島

根

竹

本

坂

郎

谷

JII

音

ŧ

河

鹿

1=

か

专

U

3

to

下

關

角

### THE USE IN THE PARTY OF THE PARTY. III TO STORY

丸 淳 裹 孝 あ 非 昇 ガ きらめ 解もうこ 0) 常 行 隊 をあ 刈 町 叉 朴 格 台 音み 嚙 1= 0) 時 te 點 で 3 1 ス じで 裏 L 0) 早 合 0) 敎 子 3 揃 都 お 家 姬 賴 が T 0 U せ ず E ייי U 國 市 T 伸 が 0 n 3 見 T T 6 信 0) 今 E び 不 訛 る 蕾 計 1= 國 若 3 7 10 た 1 日 號 足 銃 3 婦 畫 3 12 18 ル か 9 か 1= ル 後 75 18 U を た 0) は te 12 洣 た 0) な ち な 4 6 る 0 敎 書 10 道 ŧ 忘 征 か 泡 7. 0 雨 > 氽 3 ま 0) から か < 5 が 手 E 2 \$ T 生 れ づ 花 繁 6 人 6 0 1= 0) ナニ 風 除 な そ 來 专 15 ま 等 ず \$ 期 ち 禮 专 \$ 6 0 5 た 22 姿 0 れ 鋏 呂 今 大 大 尼 大 高 竹廣 须县 野坂縣 阪 阪 治 崎 阪 松 原縣 弈 多 杉 野 同 同 ቨ 同 1 同 石 同 谷 同 高 同 П 本 尾 田 本 手 本 峰 よ 吞 清 毬 河 朱 柳 1 水 重 波 夫 兒 4 몚

絹 尺

0

數 4

が

え

T

る

人

會 寢

大愛 媛 洲縣

米

澤

曉

明

Ŧī.

び

晝

同

6

82

樣

0

夜

4

歸

大

阪

曲

出

木

三月の 日 Æ 書 ウ 國 弟 釣 病 長 ゲ 7 4 L 哀 思 此藤 籐 1. 公 弟 パ他限我瞹人一 7 げ 策か 1: つまでも 1 稚 支 座 1 0) 訴 0) 堀 室 患 案 0) 0) 椅 所 眛 休 は te t 僧 事 4 か で D 1 な 膳 で 0 ひ 1= 子 定 線 汀 洗 叉 は せ T 女 1, 變 0) 1= 取 6 飲 事 子 期 お 窓 欠 余 路 5 8 給 间 俗 買 に 0 0 仕 1= to \$ 髷 自 to 油 Ξ 0 供 3 1 ネ 產 伸 0 古 小 v 丸 見 縳 to 入 上 便 T 私 酒 8 人 饒 ル 斷 に 3 金 に 0) ぜ 18 1 2 改 太 18 せ 忘 煙 鄉 用 けが 宅 が 5 骺 筀 花 否 15 0) 子 魚 似 j 3 ŀ 知 L T れ 0) は 3 如 美 で ~ 1= 札 草 7 0 0) は な 供 te 6 b ナニ る 1= た 母 L 書 才 訪 味 ク 住 Ŧī. 15 82 5 ~ L 員 1= で 2 を づ か せ 0 3 3 か・ 放 な 10 40 ね 月 to 讀 82 使 な か 品 3 U 待 夢 嫁 犇 2 續 雨 T ン 踏 5 0) た 知 雀 0 1 1 第 水 事 \$ 1= 見 0) 0 h 80 0 8 で 店 お te す 倦 40 れ 山 赤 來 出 ß た 鐵 な 將 で 立 な 來 長 器车 专 手 T あ は 世 採 \$ 悲. 青 夫 怠 3 . 0 3 棋 來 ち 穆 ず す 3 0 3 號儀 か 錠 す 3 0 砲 眼 辭 0 鳴 期 1 L 9 人 箕大 曙大 阪 川府 竹廣 朝 神 大 堺 竹廣 畏 松 長野縣 布 下 大 朝 名古屋 面府 原縣 鲜 戶 阪 施 原縣 野 本 関 阪 鮮 + 竹下曹 毛 小宮山 米谷松 宮 西 西 佐 櫻 n 同 6 西 41. 6 o l 同 林 給 同 同 同 同 尾 下 七 口 利 村 野 Ш 津 木 十十 尾 美 4 夜 雪 芳 稔 曲 旅 不 慶 可 冰思 也 5 太 月 57. 10 人 隈 登 水 栞 樓 幹 香

> 子ご 子 7º 宣蹈 屑 懷 ボ 台 一 子 病 糸泉 ٦. まさ 供 傳 U 手 所 年 0) 1 云は ま 部 淋 3 拔 れ J. 生 自 舘 す 1= 他 6 手 0) 友 慢 欠伸 E 母 社 < 資 3 1= 學 家 te ひ 1 出 錢 知 0) ね 昨 ル 科 源 町 消 尋 から to ほ 宣 0 ば 愛 0 費 に 3 兵 ね T な場 L 傳 せ 早 護 隊 C 父 12 灯 ほ 穗 10 T ね 3 0) 良 3 to 所 聲 子 本 80 te 身 18 心 1= が 音 T 出 te を 力 四 h 朓 4 意 無 な は 3 L 案 嫁 入 疊 屈 宿 L 9 \$ 3 to U 氣 8 8 御 12 3 3 高大阪府 大 大 大 厚山 下 大 大 大 原縣 阪 阪 阪 闊 阪 關 阪 狭緊 1597 宮 池 大 住 住 吉 本 保 塩 田 口 氣 田 171 弘 澤 澤 兼 比 紅 秋 Ш 悠 沒 哲 鏡 4 明 絮 多呂 呂志 醉 子 子 尾 起 志 美 漩 7k 休



## デパートと川柳

著「川柳雜誌」誌上の川柳移動座談會 五六人がよからうといふおはなし 居りますが、座談會の人員は先づ 越川柳會へ白羽の矢が立ちまし などのために御見えになつてゐま りますが、店務の都合や、御病氣 た。もら一人、二人豫定の人があ で此處に出席する事にいたしまし でしたので、私達數名はよろこん た。「天主閣」にはまだ澤山作家が したが、その第三回目に、わが三 は大變面白く拜讀いたして居りま

話して頂きませら」 神戸と各店を廻つてゐられました 座談會ですから、百貨店と川柳と 今日は我々デパート川柳人の川柳 空栗さんに各店の川柳會の有様を て、先づ、最初に、大連、東京、 いふ事に話をすすめる事にしまし

空「只今のお話を聞いて居ります 『地に落つるものに葉の音雨の音』 りますが、大島濤明さんの句に と、何だか渡り者のやうですが、 は川柳といふものは單に滑稽なも といふのがありました。その頃私 た時で、今から十四五年も前にな 私が川柳をはじめたのは大連にゐ て感心しました。 たのでそれを非常にいく句と思つ の、ふざけたものと思つてゐまし

> Pir Pir 君 蛀 落「俳句のやらな傾向の句 ありましたか」 すね。大連の店では會が 「大連の店には川柳會は いと思ひました」 に興味を持たれたわけで

0000

所の句會へ行つてました。大連に いふやらな川柳家が轡を並べてゐ 地の川柳家の批評でもしやらかと 庵などといふ様な古い人達で、内 八、中沼若蛙、西岡西嫁、湯本白 は古い川柳家がゐました。小林茗 太と私と二人きりでしたので、他 川柳をやるのは、朝倉メ

> 空「え」、さらです。他所の句會で落「それは、しるこ屋の梅村ですか」 の會は六七十名の出席者がありま 席しました。きやりは八十名、雀 は、きやりの句會や雀の會へも出

空「神戸の方もその頃店の川柳會と か昭和二、三年の頃でしたがよく は記憶してゐません。三越川柳會 あらすとはありましたか、どうだ 番翁さんの拍子木會ともう一つふ では東京の店の川柳會が一番古い いふものはありませんでしたが、

ありませんでした。店で 落「神戸の方はどうでしたか」 のです。東京では當時千壽郎、小萩 そのグループがどんな人

とにした。各地、各會の と云ふことを川柳移動座 たちで構成されてゐるか 談會の形式で紹介するこ 翼賛を乞ふ(編輯局)

落「東京にゐられた時はどうでした 其中で稍々新しい方へ向いてゐる のが、大島濤明、高橋月南、佐々 句風は古川柳調が多かつたですが は來ない。酒を飲めるから句會な たわけです。會はいつも一杯飲み も川柳は新しい方へ進まねばなら ものでした。それで私も生意氣に 木三福、井上葉吉さん達と私位な 來るんだと云つてた位です。 などは酒が飲まれなきや川柳曾 ながらやりました。小林茗八さん んなどと運動を起したものです」

空「東京三越にゐました時は、一泉 といふ會が出來ました。」 泉會がなくなつてからは梅村の夕 會へ勸誘されて這入りました。 貰つて來たのがこゝに六十句ばか 川柳を書き拔いて持つてゐたのを ります。或人が越後屋を詠んだ古 越後屋を詠んだ句は隨分澤山にあ 「古川柳で、三越所謂その當時の

りませんかし

ら作りたい。其作句者にも會ひた 川柳といふものが、こんなものな

> 迦陀僧、勢至、呵々子といふやうな 「ありがたら。大體まあ 川柳家がゐました。」

それで三越デパートの川柳會東京

だものを御存じであ 郎さんは越後屋に關 生れたわけです。蛙 それに次いで私達『 しい句で三越を詠ん した古川柳或は新ら 天主閣』の川柳會も を話して頂きました 大連、などの思ひ出

落

約百何十人の川柳家が出來てゐる ので、まことに心强い事です。 句會もやつてゐます。合併すると 止場』とそれら、柳誌が出てゐてには『天主閣』、神戸三越には『波 今は東京三越には『富士』大阪三越 **落**「其中で比較的よく世間に知られ りあるのですがし

蛙「大抵は越後屋の店の大きい事、 『駿河町疊の上の人通り』 店の大きい事を詠んだ句では んです。 店員の多い事などが詠まれてゐる

『はやり風三井が店に小牛年』 といふのがあります。當時江戸中 ・江戸中を越後屋にして虹がふき。 次の句は貸傘の句ですが 「尾頭をつけて鮪を三井買ひ』 賄ひの大きい事を詠んだものは 一酸河町中吳服もの取り散らし』 の人が越後屋といふものを誇りと 店員の多い事を詠んだものでは してゐたのでせら。

せんが、或は藏の中で川柳を作つ 其時分越後屋の番頭さん達の中で 分店の番頭さんにも川柳家があつ 其當時の大衆が越後屋に親しみを ートに人々が馴染んでゐるやらに 川柳をやつてゐたかどらか知りま 持つて、越後屋の川柳を詠んだ時 てゐたかも知れません現在のデパ たかどうだか調べがつきませんが、

柳川 解題 と例 路 句 郎

1 ス・

或は落葉樹、檜類などが用ひられてゐ ★ス・フの沿革を簡單に述べると。一 常な苦心が續けられてゐる。 事を研究し純國産品にしやうとして非 る。目下ブナのやらな濶葉樹から作る の材料の幾分は海外から輸入されてゐ るであらうが、現在では準備中で、そ くしくは滿洲からも多く産する事とな る。内地では北海道、樺太に産し、 に繁る針葉樹のえぞ松、とど松、もみ る。材料は木であるが、主として寒國 造纖維)の略稱で人繊とも呼ばれてゐ ★ス・フはステーブル・ファイバー(人

ると見なければなるまい。伊太利がエ 出て非常時色の濃度を强くした。 夏勃發した日支事變の經濟統制によつ が、さかんに製造された。我國でも昨 チオピヤと戦つた時にも同様にス・フ 大戦の勃發とドイツの工業力の資であ ・フが工業化された大きな動機は世界 大々的にス・フの製造を敢行した。ス 給の建前から紡績資源局の獎勵の下に 服原料が欠乏して大變惱まされ原料自 棉花羊毛の輸入が杜絕したドイツは被 ところが一九一四年世界大戦によつて 功して居りながら、どうしても經濟的 によつて實驗室での技術には立派に成 濫觴だと云はれてゐる。その後の研究 た絲を造つたのがス・フ(人造纖維)の ルッアが人絹屑を原料として毛絲に似 九〇八年(明治四十一年)に佛蘭西人べ て、ス・フが新興織物として一躍世に には成立たないと云ふ狀態であつた。

すれば次の二十三工程となる。 となり、織物となるので之を更に細別 の四つに分けられる。詰り材木から、 パルプとなり、ス・フとなり、ヤーン ★ス・フの製造工程は「パルプ工程」 ス・フ工程」「紡績工程」「織布工程 「バルプエ程」(一)針葉樹の森林伐截

たです

ると思ふんですが、断行しなかつ みて、ふつと買ふ氣になる事もあ が一寸つけてあると其句を讀んで ます。殊に食料品なんかは、川柳 たらいゝといふ話が店で、よく出

落「店で催物の相談會が開かれると

よくさらいふ話が出ますが、

店に

「これは小賣商店と對百貨店の問

姓「三越を詠んだ句にはあまり 落「三越を詠んだ句にいゝのがあり のがないなあ」

空「劍花坊さんの句に 『三越でいゝ香水とすれちがひ』

といふのがあります。僕の句にも「三越へ來てフェルトの踏心地」 々人の會柳川越三(3) 司 合 小 西 落 7

井 П 空 蛙 栗郎

田 生 口 葭 朴 七 武乃 堂 步

上濱

栗

原

した。其時の記事 へ運動會に行きま 「二三年前、奈良

落「これは新見さんが來られたら何

といふのがあります」

墨

事だと思うのです」 張り此寫眞をカットするのと同じ は非常に役立ちました。川柳も矢 て來ますので宣傳や廣告の仕事に ットすればよいかといふ事が解つ が、本店からも賞められて、非常 つて見ました。これは、何處をカ に好評でした。私は前に寫眞もや

から見てからいふものは川柳味が聞きしますが、催し物とか宣傳法 あると思はれるやうな事はありま

席されませんから、蛙郎さんにお

積りでしたが、今晩は病氣で出

七「何か少し材料を探さらと思つて 落「單にデパートを詠んだ句はあり 3 ませんか、七歩さんはどうですか い直ぐに草臥れて寝て終ひますの たんですが此頃は夜業ばかりでつ

君 栗

七「あれは、表面的なお辞儀をする 落「七歩さんの句だと思ひますが 『デパートの型にはまつたお辞儀す といふ風にとられると工合が悪る る』といふのは」 いと思つて自分から没にして出さ

は「商品の説明なんかに川柳を使つ

落「空栗さんはありませんか。貴郎 せ』といふのがありますね」 なかつた句です」 に『生きてゐた人を三越ひきあは

んね」 気が引けて、積極的にはやれませは川柳家が多いので、どうしても

蛙「あいつは、何でも彼でも自分の 趣味へ持つて來ると思はれやしな いかと思つて遠慮

せんでしたねし のは川柳がありま 家の記録』といふ 店だつたら、もつ しますね。自分の 「蛙郎さんの「我 いと思ひますが」 と川柳を利用した

に寫眞の説明を川柳でやりました

落「いつかも、主任といふ題 の時に天位をとつたのが、 く捺し』といふのでした」 は『新らしい主任は判を强 無名作家で、しかも閨秀作 家道子といふのでした。句 「女店員の題の時には偶然

七「『友達がやめてやめたい女店員」 東方は東京本店、銀座支店、新宿して柳人を羨ましがらせてゐる。して柳人を羨ましがらせてゐる。れた會なので、東西三越の川柳競和と曾なのは、東西三越の川柳競 どんな句だつたかな」 に同想の句があつたさらだつたね。

蛙「川柳を全店員から募集するのも 落「落水さんの句にも 『感謝デーなどとデパート儲ける氣』 といふのがあります」 關係の深い題を出しまし んかも、なるべく店の人に を造つてあるんです。題な 面白かららと思つて、投書箱の塔

す」(交責筆記者)

神戸支店で第一回は西方の勝、第 支店の川柳人、西方は大阪支店ご らか御自由に雑談に移つて頂きま 座談會はこれで打ち切ります。ど

點の差で惜敗だつたそうだ。 二回は東方が勝、第三回は西方五 『デバートにまけてはならぬ旗をた 題で、やかましかつた時代の僕の

といふのがあります

步 t

君 朴「考へて見たんですが、今夜來ん 落「貴郎が遅いので、先に始めたの 落「朴堂さんは、有恒倶樂部の會員 が貴郎にありませんか」 (此時上田朴堂氏出席)

落「いや、どうも有難ら。 党 君 朴

落「あれは、同時に、二つの會が閉 のでしたが、同想の句があつたん かれ、集まつた人達も違つてゐた といふのです」

(バルプをアルカリ液に漬けてアルカ

(四)パルブ「ス・フエ程」(五)浸漬機 (二)流木(運搬)、(三)パルプ工場、

蛙「さらしてみると、そんな氣持ち が皆んなにあるんだね

を作る)、(八)熟成槽(ヴイスコース

とアルカリで溶解してヴィスコース

ースを小さい穴から壓出して繊維素 を貯蔵する)、(九)紡糸機(ヴイスコ 解機(アルカリ繊維素を二硫化炭素 カリ纖維素を碎粉する)、(七)硫化溶 り繊維素を作る)、〈六〉解碎機〈アル

ですが、三越とか、デパートの句

朴「それは『パッテインが蝗を追つ てから狙ひ」といふのです」 の句がありましたね」 ですから鉄なものはありません」 ません。あつても記憶に残らん位 ならんと思つて、ところが、あり で、ゴルフのピカーです。ゴルフ

これがス・フですと男工立たされる ス・フにしたところで苦し子澤山 秋

織機(織物が製織される)、(二三)総 機(並べた經糸に糊付する)、(二二)

(織物の經糸を並べる)、(二一)糊付 (一九)糸。「織布工程」(二〇)整經機 八)精紡機(糸を目的の太さにする)

間に挾んで引伸して糸にする)、〇 る)、(一七間紡機(練篠をロールの 引伸して一定の太さの細い練篠を作 綿篠を引伸し、その何本かを一本に 不純物を除く)、(一六)練篠機(太い 綿機(ロールで梳いて綿に含まれた をほぐして綿莚を作る)、(一五)梳 アイバー即ち棉の塊となる。「紡績 ひ乾燥する)、(一三) ステーブルフ る)、(一二)乾燥機(繊維の脱水を行 げられた糸束を一定の長さに切断す 品で處理する)、〈一一〉切斷機〈仕上 を作る)、(一〇)後處理機(色々の藥

降つて來たよとス・フおどかされ

ス・フ着てもひけはとらない目鼻立ち 利 生 ス・フ展の人形皆になでられて したつばと見たかティラー、 たけを

類まれもせぬに漫才ス・フをほめ ス・フ入りもやはり月賦の御厄 洋服へこれがス・フかと背に廻 茂・フを 方り 巢



混言 储

> ま 0

歸

3

を

貨た

し夏

0)

畫

h

3

す

0

雜 C か

ほ U 3

か T

3

犬 友 蟲

b 6 te

-

バ塵

ィ

0)

2

9

す

大 迷

須

豆

秋

云 5 大 阪 Ш 疲 れ 綠 雨

te te 0) 2 見 陽 0 < か 4. び あ な 6 1= 0 n 0

砲 蓮 大 沼溫

0) 3 6

下

T 0 < か

眞 高頂

夏

池 木

城

3

な 良

J:

ŧ

0

阪 高 橋 か 13 3

ボ ま C 2 は 步 首 35 Ŀ.

柴

陽

花

大 阪 丹 路 分 蚰 師 出

が が た 0

あ 力: ス 終

か 0 ツ

す 掃

草

が 忘

び 6

汽

窓 俺

な

0

d;

H

章

0)

掌

to

蛛 直 征

0 1= te

巢 似 送

除

れ

ほ 話 0) 月 顚 ス 日に ・フ te 14 な あ 3 眉 3 ほ 金 重 夜 な ね 0 U 0

> 酒 醉

< S

3 父

\$

は 寢

父

1= L

な \$

0 灯

3

0

T ず

苦

te

减

且 夢寂

3

0) 妻

多

\$ U

れ

ば

事

變 那

F

を 妾

な

0)

te

U

\$

落 張家口 岩

路

to 1

0 3

> 4 扇

4

貰

H

0) 帳 用 品風 は 0) 呂 7 重 1 1 フ 音 か 0) L 肥 向 え た

腕

券

0 专

> 他 < 要

1=

當 T U

で

ラ 異

才 無

附

花

B

あ

あ 嫁 ヂ 存

は 1 操

軍 ル \$

汽は

酌 3 な 3 康縣 氣 水 儘 谷 鮎

美

俄

同

降

6

ね

ば

な

6

82

3

-

~

る

貯 枕债

金

報

或

艺

食

は 0

天 干 3 < 干

te

8

ナニ

0

カ

1

寂

L

U

22

3

獨

郎 選

> 籍 名 0)

か

あ

0 0 誰

行

先 書 < 方 上

を

云

3

T

出

小 3

柳

子

八日、川柳雜誌へに開講。

大なる創刊五十周年記念川柳大八日、川柳雑誌社後援の下に盛へ野工新報社(大阪)では六月十

簿 次

0 は

隊 か 後

3

\$

直 3 母 訣

征 0) 5

か

見 が 别

硘 る

3

れ

3

心交 寫 叉 淋 眞 點 < 善 小 JII 6 < te 子 あ 大 走 わ 3 3 疲 T 風行 to 松 下

大 阪 後 藤 青

兒

階友和俱樂部に於て開 會を東區今橋二丁目神田ビル二

催

3

た。當日は路郎主幹を初め、

花 似 T

0)

男

+ 0) 化 店 U to す 覗 3 氣 か な な 0

1= L 5 3 征 0 1 0) な 0

宫 白 峯 (題召)

松 水 石 曾 根 兄 郎

日と十七日に住友金屬、☆石倉盆な講話があつた。

) 一 六 月 十 一

日に開催された。 例句會を、

された。路郎主幹出席

大 中 西 お 3 to

於て開催した。

主幹出席。

阪大川柳會は六月二十九日に

刻より尼ヶ崎衞生組合事務所に ▼尼ヶ崎句會は六月二十九日夕り開催された。路郎主幹出席。 造所の俱樂部日本間にて夕刻よ

出 3

面 T 白 T L 人 長 留 屋 守 日 本 晴

阪 加 藤 來 ラ 1 1

大

築された。

▼路郎主幹は「だいき」六月號

「ほととぎすを川柳に聴く」を執

▼川柳雑誌社六月例會は九日清があつた。
▼松坂倶樂部趣味道場の路郎川東魚氏「古句研究の仕方」の講東魚氏「古句研究の仕方」の講東魚氏「古句研究の仕方」の講 講森清

カットにし、

カットにし、連載發表して好評へ「川柳雑誌」掲載句を川柳漫畵▼大阪日日新聞では同紙の三面

路郎主幹、恵乃女史、 西いわを、黒川紫香、後藤青兒 西いわを、黒川紫香、後藤青兒 西いわを、黒川紫香、後藤青兒 西いわを、黒川紫香、後藤青兒 西いわを、黒川紫香、後藤青兒 本水、鼠本雅幽、多田一波、野本 本水、鬼尾潮花、宮口芳醉、永 田里十九、須崎豆秋、北山悟郎 田里十九、須崎豆秋、北山悟郎 田東十九、須崎豆秋、北山悟郎 郷を命ぜられ、目下銃後の一員路郎主幹出席。尚同君は即日歸相寄つて送別の午餐を共にした 西いわを、黒川紫香、後藤青兒路郎主幹、葭乃女史、關口義隆路郎主幹、葭乃女史、關口義隆 月二十五日應召人隊に付き會員 るの諸君に歡送され白峯君は二 て開催した。 洞會員) され勇躍○○へ向はれた。 閉會後、有志柳友にてサ、ヤカ は折柄開催中の藥石川 である。 ▼立川跳二君(有恒川柳會)は六 キラ氏等の柳友、 にも意義ある會をカナメ食堂に 2、艸樂、里十九、豆秋、かほ日午前十時片江の自宅より路 市塲沒食子、 尚没食子君は二十 近親者に歡送 その 柳大會の

を接せんばかりの盛觀だつた。なる柳友八十數名が來會し、踵

▼有恒倶樂部有恒川柳會では定

席された。

尚京阪神よりは熱心

鮎美、豆秋の各選者が出席され

古句研究の花岡百樹氏も列

乃女史、艸樂、

かほる、

絲丽

例會を開催、 路郎 注解出

の附録として三拾萬刊行された ▼笠原路生君はサンデー毎日に を執筆された。 輯として川柳評釋「古川柳の味」 ▼路郎主幹は「全國叢 人の顔・動物の貌」を執筆され 同書は全國便箋 指書」の

> 左の句信を寄せられた。心奉公の覺悟に有之候」 ありがたく奉深謝勇躍入隊、

云

軍服は覺悟の髭によく似合ひ

▼小西無鬼君(篠山)は六月二十 として業務に奮闘されてゐる。

日應召されて「御祝電に接し

柳人の一擧手一投足を此 歡迎する。 したい。皆様の御通信を 展望欄ですぐわかる様に 全國川柳界のこと各地川 T 弱身

2 か

0) 鳴

皮 <

若 安

婦 サ

は

米

3

6

V

僧

3

思

-)

T

ŧ

女

性

2

報蚊詰 丸烟 刈 手 風 は 1= 機 3 な テ 2 1 T プ 召 集 風 か な 9 3 强 問 < 鳥 は 見 れ せ 生

古

弗

そ 心 5 見 0) 送 3 0) 9 > 見 5 送 階 0 0 獨 身 者

帳

b

恩

3 0) 0 " 時 身 岳高原に 計 は 3 3 7 P 0 6 3 0 大 支 to 阪 持 3 5 IE. 丈 步 U

指 外

輪 交

松 1= ね T 富 1: Ш 0) な ほ 高

這

3 \$ te 糸 兵 切 隊 9 虫 0 ŧ 0 5 L. T 來

瀧ひ

5

专

馬

鹿

15

男

#

\$ b な 丽 大 幕 を 阪 見 L は が 伸 支 び 配 T す 10 3 <

拔

髮 1

明 な

主 L

T 或

居

3

to

3

IJ

金

井

有

爲

郎

策 U 婦 大

0 ば 0)

線 白 ル 0

沿 が ズ

胜 戀 電

日 b

t

今 ŧ

H

3

車、

異 ヤ 狀 聞 着 か 3 妹 T 蛸 良 n か 3 0 0 收文 8 帳 5 た 0) 醫 者 中 艀 0) る 門

> 1= te

> 哭 持

> > <

花 X

折

6 1

3

H

te 污

to 12

ナニ

邊

曉

童

及 0

3

3

3

1

な

ŧ

2

7 0

1= 10

1=

ず手

躰 18 齒

0 ヂ が

大 阪 岩 橋 双 虎

金 澤 安 JII 久

は 征

ナジ 3

L 君 白

1=

3

す

6

れ

T

る

る

百

度

石

C

風

f

3

3

6

0

中

吹

3

氏

出

征

留 美

ラ IJ 1 嗤 3 0 P

大阪府高石町 to 3 大 豊 6 T 82 4 阪 第 3 n 1: 12 Ξ # 丸 T 黑 大 る 者 15 る JII 尾 る U \$ 0) 水 紫 潮 形 0) 手 容 花 否 か 窓 水 萬 名 長 先 # 川今女敵 温 す水 + 先 髭蛙 泉 3 歲 聲 期 ٦. 0) 柳 日 中 降 叶 方 0) T 1 E to te 抗 to 報 0 0 る

親後ハ ふ銀 川墓 春 3 行 0 Bi か 1 -字 3 6 丰 は を 銅 1= 突 12 (1) 2 3 挨返グ 寢 切 1-貨 事 0) 3 拶 お ŧ 3 樣 拔は 歸 ょ 落 現 4. 5 實 \$ 電 0 乳 は 0 0 話 嬿 T 9 to で 爽 房 ば 座 お 治 E L お te 6 80 暑 行 座斷 は 今 82 \$2 渡 す 0 言 な L

君 利 賣 0) 巧れ 夢 יי 3 戰 耳 は妓 小 弟 L T L 親 0) 財 to 子 散 8 b 布な 13 娘 會 < 3 忘 2 3 ぞ 0) ŧ 0) 0 12 思 覺 て大 1= U 如 朝 U 悟 蚊 來 根 5 < 鮮 古 す た 3 8 が 0 池 11. 男 17 1 3 0 T 1 友 4. 田 た 行

П

筲

三福君の「思ひがけない」大島湾明君の「久濶と皆んなられしそうな額」等々々の内容だつた。 ▼丸尾潮花君宅に於て開かれた 岡町支部會員七拾名突破祝賀川 柳大會へ參席された、二十數名 の柳友諸君より熱のこもつた寄せ書を頂戴した。 ▼酒井斗風君(兵庫縣)は風雨の中を突ッ切り大峯山上へ到着して「大峯山頂上印」を寄せられた

专

居 F. 同 T Z 宿 3 40 1 は 3 電 3 は れ 细 車に t 3 1= 金 1 魚 0) F V. フ 駄 20 3 I あ 0) 云 to J 5 長 ED 1 女 わ た 學 T ズ 临 手 es 生 を 柳 5 擴 け 秀

松 0 Щ 光 酒 0 井 大 樓

私 + 日 空 生 つ活 を 嗅 4

市多樓君を迎えての市多樓君を迎えての大。 た。 せの久書盛米 き會雄

▼下陽支部、市多樓、九呂平、山尾、一角、柳星、半休、氷川山尾、一角、柳星、半休、氷川 せられた。
▼宮内耕郎君の 寄せ 嘉 せ書を本記義)より 社万 書が 寄し

默然人君の「倖せでせら」佐々木ます」云々を初めとして、和田たみ、大先輩におめにかゝつてたみ、大先輩におめにかゝつて宮尾しげを君の「川柳のありが きし 顏高振須 市場没食子君より た振須寄れ 寄せ書がこの程舞れを見て下さい」と 部無 ぶ事入隊 一舞ひ と前 h 込前書こ てが

す

影

木田 け仕 美笑君が當られる。 支部を設立した。 対 が は に、川畑 は、部屋になり、部屋になり、部屋になります。 た川▼ 。柳岩 雑橋 ・六月號近作柳樽二戸のしとし君の作。 『紙ハブ茶の匂ふ部屋 『屋にちりの誤。 台中 支 誌双 |社不朽洞會員に推薦 部を嘉義支部と變更 屋に

で官幣大社、淡路陵、四 「 橋本綠雨君(大阪)よら 「 本橋本綠雨君(大阪)よら お喜こび申上げる。 腎補に榮轉された。 ▼宮岡白峯君(不朽洞 ド野里助役に終 ・ 本語長に榮 ・ 本語長に榮 ・ 本語表に栄 ・ 本語表に 本語 つて高松、 へ入院 森鷄 中の子 祭轉され各方面より 目出度く退院された 所君 榮 君(大阪府 てゐる。 伯淡路 轉の 大阪)は 此程全快されて(阪)は阪大病院 栗林公園、四國へ 曲 市電運輸監洞)は二十五 市電監 四句 御は 開市バ 云岡、へ淡路

られ政二君と命名さ年前二時半目出度く君(尼崎)の令閑は五思(尼崎)の令閑は五慶び申上げる。

大阪

典は

火を撃っ

げニ

島琴平、白峯陵を巡拜後、岡山で後樂園見物の豫定です)云々のお便りを頂いた。

▼北幹夫君(○○)より「鏡は一一度見るか見ないかで自分の額を時々忘れるであります」と心臓のおとなしいお便りを頂いた。

▼龜井晨修君(南舘)より北の國の香高き鈴廟を頂いた。

「神人總動員した三週年記念大帝の寄せ書を事務所へ寄せられ なしいお便りを頂れるであります」 ないかで自分より「鏡は一 を頂 れ大治 國

惠子と命名された

度く四

山下秀峯君(大

(阪)の

今開 安間は六

が到ったり VV VV 字写口玉葉君: 多田

田窪 市他樓君

君 (今治)は

下

- 闕)は

多樓

治石鐵

はは山山 .

改

姓

醉

改

號

東ス 旭區 ス旭 區 4

玉川 生江 北久 町 江

なり

川柳雜誌社北鮮 た三北。鴨鮮



### 集 句 路

青空の下を銃後のハイキン 青空が見えてブランを ブランコの足青空を蹴 青空へ大の字になる若さなり 雲雀最う青空こなつた 唄ひやう 打ち明けた戀に青空雲もなし 青空にはつきり讀めるアドバル 青空へ伸びゆく子等の唄が合ひ 空へ 空の微風にゆれるアドバル 傯 空 惱 空へきれいに並ぶ重爆機 空へ高等飛行の音を見る 噴く山 激に揚げた日 空へふご故 原を過ぎて彼方 te 為環を描き環を描き お國自 が静かで < げ 高 慢 ば 里 の丸青 0) 原 を思ふなり 眩 し青 城が見え 江 0) つてゐる 空蒼し 靑 T 青 直 4 4, 1 空 " 空 空 空 寄與史 久米雄 南濃路 余志雄 芳 鴨 薬 薬 波 起 路 光 水 星 休

青空の眞下で戀がはぐくま 物干へ吊 働けご 青空へハッキリ日傘ひらく 起 ホワイト 青 青 大 (佳)青空5平和の村の日章旗 (佳) 青空の高さ歸省は落ちつかず (住)日本晴母を忙しくさす日なり (住) 青空の下でテリャの仔が賣れる春 (佳)不平なき心青空見上けら 空へ父ご子 空 空の下で泪がかはいてき 重機の怪物め 地 主 へ煙突邪 敎 只 れるだけ吊る青 シップ唯青空があるばかり 青空 へてくれた青い. 空 供 隧 いて青 な長さな 0) 感 深 謝 呼 い空 を 4 れ れ 晋 空 吸 0 L H 同 紫 4 文 水 良

## インキ

夏服に去年のインキついたま、 兄弟の誰かもつてる赤 壁へ飛び疊へ飛んでインキ出る 處方箋インキが飛んだまま書かれ インキ今かすれて次を忘れたり サラノーミインキで書いた五千圓 インキで書いても皇軍の日章族 末の子へインキは怖いものにされ インキ

久米雄 謙南坊 松太樓 謙南坊 布 巢 容 花 否 風 庫 知i 試験勉强今日からします赤インキ 代筆はインキも添へて頼まれ ランチタイム指にインキをつけたま サインしたインキ縺れた糸の 瓶底へインキ殘したま、病 んで 這ふて來た小供インクの笑顔なり インク壺前にお詫を聞 白 賀狀までペン字 先生の若さ (住)インキ蟻かやした過去をなな持ち 聴 住)美しい悩みへ青いィ (住)保險屋のき書く気意インキ出し由 無雑作にインキで書いた 保 證 絹ヘインキのしみも女事 服 0)

選

ンク壺

謙南坊

明布

鴨

務 る

風

同 4 久米雄

鴨 由

路 布 巢 尾

春 Щ

かぶと 美知夫 寄與史 薬留路 京 良

波

(佳)インキ瓶汚れた儘で世を終り (住)宿題へ兄はインキで教へで居 (住)新刊のインキむさほり嗅を病み葉 (住)代筆はインキで書こうこ次のきま

文 風

庫 葉 光 路

(住)悪筆は結局インクで書くこきめ市多樓

無

煙

香

明

は川柳家は殆んど水渦をまぬが た。本稿をメ切るまでの情報で は兎も角、とりあへず住所の判 が案じられるので、つくつかぬ ことも出來ない。川柳家の身邊 ツカリ杜絶したので、 甚だつたらしい。交通機關がス れてゐるらしいので、 つてゐる限りはお見舞狀を出し どうする

賀記念品贈呈資金は

ものも、

なるべく各人の姓名、

したい。吟社でお扱ひ下さつた

りたい。御好意をいつまでも傳

へたいし、記念品にも芳名を掲

雅號、口數など御報告にあづか

▼久良伎翁の古稀祝

各位の御賛同によつ

お見舞申上げる程度にとどめ れは見合はせ誌上又は個人的に 慰問川柳會なども考へたが、こ

川柳家の大同團結がのぞまし 援を願ひたい 更に痛感してゐる。 い。川協はその使命の重大さを ▼こんな時にも、もつとく 層の御支

至急御申込み下さるやうお願ひ ら機を逸することもあるので、 で、つひそのうちにと思ひなが

> だの方はよろしくお願ひする。 もう一ヶ月半しかないので、ま げる事にしたいと思つてゐる。

神戸や阪神間の水禍は隨分激

ゆつくりしてゐるの

つゝある。締切が、 て、別項の如く蒐り

栞

短

(佳)ペンだこへインキをつせ多忙な (佳)インク壺何處に置いても危なず水 (住)青インキ無心のここでにじゃ來紫 (住)インキ跡の疊を廻す大掃除

春

巢客

動)判取へ今度はインキ出すぎたり

詩

悲

鳴

キ (グ)

滴 世

3 赤

9 1 時

4 しとし

いてゐる

市多樓 文

やう

庫

知

0 1= T 變 3

٠

品

贈 呈

に就いて

本通三丁目三六番地

川柳

五口

屈先は大阪市西成區玉出

十十口口口

北島櫻柳山井

一步君(大阪)

小計六十四口

累計二百十二口

蛭

子 部

ま

す

君

同

六葉君石川

П

[H] 高

風 下

君 君(同

同

のために貢献されたこと 私財を投じて多年、柳壇

申込んで下さい)

記賀祝稀古翁伎良久

賀に堪へない。

翁は資性穎敏直情の人

られたことはまことに慶

下柳人に募る事とした。左記 祝賀記念品贈呈資金を晋く天

\_,

詳細は前號參照 四番を利用されたい)

柳

協

會

十口 三口

> 田 住佛法僧 Ш 村

可

同) 同

によろしく。

六月八日

安達 池

北

洲 宵君(

君へ

小規に據り御賛同を乞ふ。

一、記念品贈呈資金は

口三拾錢のこと(幾口でも

☆贈呈者御芳名

三口

宮燈

會員)が齢ひ古稀に達し 良伎翁(川柳人協會名譽

日本柳壇の耆宿坂井久

は何人もよくこれを知る。

▼前略

健在慶賀至極奉存候 不肖其後至極

茲に我が川柳人協會は古稀

はなるべく振替大阪三一

五.

三口 三口

化

堂君(同)

千 堀 奥

君

同)

人協會。

(記念資金拂込み

E 萬

樹

君(高麗社扱

柳

君(同)

### \* 柳 素 描

## (二九) 佐々木三福君

柳人であるが、所謂新興派川柳人の如く に新らしい詩境を趁うてやまない新興川 三福(さんふく)、佐々木彌太郎君は常 **毎闘的で** 

でない。 我的でな ない。自 い。狭量

悠々せま

かも大連柳壇にあつて大島濤明、高橋月 が人格の然らしめるところであらら。し 圓みある詩境に自ら樂しむといふ點、君 らぬ態度

南、井上麟二の諸君等と共にその繞名を

往

川柳以外の趣 ではない。 社の重役稼業の君にしては蓋し凡庸の器 童話の創作に異彩を放つなど、關係五會 し、
諸曲をよくし、 柳以外の趣味としてはゴルフをよく 寫眞をよくし、 時に

秒針の及ばぬ國のう らら か さ揺れながら削られながら辿る路

著書としては句集「柳絮」がある。 屬吟社は川柳相生吟社、川柳人協會理事 部長の要職にある。別號は磯谷健雄。所 のの取りでは、川柳人協會理事 のの取締役兼登業 谷町に生れた。現在は大連市臥龍臺に居 君は明治二十三年九月十四日、鳥取縣青 に君の句風を見ることが出來やう。

生杭に逆芽の出たる雨つゞき

(滿洲開原二葉旅館戶倉普天) 貴社愈々御隆昌先生益々御

### 111 協 會 員 を 募 る

日に月に發展しつゝあります。此の 際こぞつて御入會下さらむ事をお願 川柳人協會も皆様の御後援により いたします。

會費一ケ年 一丁目三十六番地人阪市西成區玉出本通 半ヶ年 壹圓六十錢

### 振替大阪三二五 協 79

度(室内) 乍ら乾燥 地より凌ぎやすく せる微風ありて内 ▼新京は攝氏三十

飛

頃を語るものに候七月中旬に歸阪可 か變り居候此繪葉書は恰度滿洲の今 夕方の凉しさは一入に候朝七時カン し候は事實に候蠅あれど蚊なし、 **〜照り夜九時尚外は明るしいさゝ** . 來 燕 誰やらが満洲の夏 は惠まれてゐると

本日、午前中「うしろ禿山前は海」でる三十日出發北支派遣軍に肩替りし 午前中「らしろ禿山前は海」で

子子、 草雲 紫、秋史 紫浪、寧

度住み馴れたる南京に別れを告げ去頑强乍他事御安意被下度く候尙此の

第二の使命に勇躍近日中に前進する 有名な〇〇へ到着致し候與へられた

▼植山九天氏を支那に送る

日年昭和 日年昭和 日本六月十二 日第鎮局 つて右よ (前列向 如き感有之候 かと思はれ候○○は風光絕佳西歐の

津奈、至 葉米彌め郎り) 白外 松風 一久作な外 九天、康 雄、昇玉 (中列) 葉留路、 南京と別れる日

筆坊、竹

宏、天八 サービスします。 口一のカフェー奇麗な女の子が道頓 て只今綏遠に向つて をして石佛を一見し 何れ歸りに又寄ると 堀に負けない服裝で なりました。カフェーオペラは張家 ▼張家口では岩崎柳路夫妻に厄介に して大同へ來て用達 風よ吹け五色の旗にさようなら 轉職のあご紐キッと締めなほし 〇〇に上陸

ます。 土の色 入衆を知る雲の峯 車中にて

ひさし、

ツクも人間も大もみ 僅か一%の中に入つ 心下さい。みなさん た幸福さです。トラ %やられた當町で、 んな無事です。 キありがたら。九九 開門門宮尾しげを ・早速御見舞のハガ 御休

さつばり詩境も浮ば 長町の家へ來てから 一年の空地もない

> 夏は靜かな禪堂にこもるか、さもな くば二ヶ月餘り海岸の家に間借した 長屋から聞えるラヂオもいや、この かり見てゐても更に感興なし、 ない。近所の物干に並んだ植木鉢は

いと目論見をたてゝゐる。金澤もだ

んく一都會くさくなつて住み心地が

久留美)

わるい。 戦地のは特高の儉閥へ廻はしたのも あまりに發表は出來ないのもあり、 ★飛燕往來は隨分面白いのもあるが (金澤、

四月廿三日〈宵明

ある(路



る

いとはんに相合傘を强ひられる

蒼

規青稿投

、用紙は原稿用紙又は投句箋の事で、投稿先は本社宛

出 六月例 席 者 名 會 (順不同) (大阪)

里八仁幸吞巨 十 九步 葉水人 東い潮水大富 わ 魚を花客水士

艸紅路 參呂郎

沐

ライト

兼題「魚 釣り」 艸 樂選 蒼

初

生意氣な顔がびくをばのぞきこみ 乃兒天 アか蒼 亞 松紫 變 キほ 太 ラる 風 鈍 郎 香 人

魚釣へ浮世一日忘れたり 釣に來て泳いで見たい子にこまり 誘はれて來た魚釣は泳ぎたし ぼろくそに言われて釣の手を洗ひ 魚釣のふつと孤獨の身が淋みし 魚釣へ同じとんぼが飛んで 行き 魚釣へ自我を忘れた顔でゐる 火をかりに來て魚釣へ話しこみ 釣れるまで待つ氣自轉車立てかける 々は濡れる支度の魚釣り ライト 變人 かほる 紫 香 水 富士 沐 E. 步 天

> 交叉 點女房を叱り子を叱り 交叉點西陽と成つて混んでゐる 專 交叉點で別れて女振りむかず タクシーと自轉車交叉點で少しもの 孝心をハッキリ見せた交叉點 スタートの様に待つてる 交叉點 體を二つに切つた交叉點 度逢ふ日を考へる交叉點 席題 交 叉 いわを選 步選 變潮變同 水客 里十九樓 大溪水 人花人

俺だ貴様か腕と腕との第一線親と子の對面となる汽車がくる 初對面名刺忘れた詫びも云ひ 對面は頭の禿げた事を云ひ對面へ親の立場にある話 對面をさけて主人は朝を出る 初對面何處かで逢ふた樣な顏 今ぢやから云ふがと印象語り出し 音の 面へ母は少さく隅にゐる 對面噂どほりの癖があり 中で對面 して終ひ 里十九 松太樓 潮花 かほる アキラ 水吞 青 兒 步 客水

六月四日

歌舞伎座

雜

對

是れからはいやだとにげる最合傘 相合で來て云ひ譯をして這入り 相合傘似合まつせとひ やかさ 相合傘女は少し下を向き 相合傘驛があんまり近過ぎる のぞかれてみそうに戻る相合傘 最合傘自動車ドアーあけかける 女房に言ふなと傘をきせかける 合傘雨を忘れて居る姿 點で相合傘の羨まし 合傘女の方は醉ひすぎて 席題「相 合 傘 はる選 松太樓 里十九 ライト 互人 天樂

松太樓

選

大溪水 變

富

番附を塞ら見てゐる鴻 年寄りの名で一ち二場所取りはち 番附がパッサリ落ちたみだれ籠 食ひ物の番附出したなと笑ひ 小金ためて長者番附などを持ち 附で見る住友に呆れ果て 附の頭にのつて親思 附を見なほす今の愁歎 池 O 路 鄉 東潮 八葭東 路同 水

> 花 客 步

> > 汽笛運ば

れて來た町の

風

の汽笛も

輕く處女列

く日曜

草婁子

魚

休

雜川 梅田支部句會 (大阪)

ふるさとの密柑が届くお正月 ふるさとの水掌に掬めばぎんの月 抱きあげた子へふるさとの子守歌 ふるさとの瞳に巡む朝の洗面器 ふるさとを銀座にもつた娘のほ ふるさとの土塊靴でなっかしみ ふるさとの雪そのま」の汽車は着は ふるさとの支線へボギー やなぎ會句報(その一)水谷鮎美報 3 車が通 山雨樓選 靜鮎 秀 鲇 4 曲 翠 酮 波 美 峰 美 風 布

長兵衛は湯槽の湯氣をあげただけ 播 隨 院長 兵 衛 同鮎 美

長兵衛の夢は水野を斬つてゐる 六月十五日 鮎· 卜 對 座 於茶房ほ 吟 3:

妓らは犠牲となりし日 襟ふかく犠牲の涙地 言も謂はず犧牲は笑ひゐる しをおぼ にお 天野ト ちぬ 居 卜同 鮎 報 美 居

容

二級の瀧ハイキング

五月二十日 汽笛、 先輩、月賦、散髮 於 福岡葉留路報 廣·鐵俱樂部

廣島支部句會

ハイカーを振り向かせてる急停車 急停車するまで汽笛鳴りついけ 笛で片附けて行く通過驛 久米雄 薬留路

突當りそらに按摩のよけ 按摩ふと昔の惚氣云ふて去に 褒められて父の按摩に子は疲れ 按摩さんとは見られたくな、黑眼鏡 ラデオもらしまひ按摩の笛をきく 世を捨てた身體按摩を呼びにやり

て行

先輩に任せてくどるネオンの灯 先輩に今日の野球の評を受け 赤い灯に先輩額をきかせてる 先輩に一度會ふ氣の廻り道 先輩は床を背にして座らされ 先輩の手前大言壯語出 先輩は酒の修業も教 吹雪の底を汽笛 麥の穗をゆすつて汽笛ひどいてき 出征へ丸刈りにして未練なし こくろよい假睡床屋に起される 散髪をして盛り場へ出たくなり 蒸しタオル當て、床屋は一服 夫婦して子の顔刈る日 月賦苦に追ひつめられた十二月 月賦とは知らず子供は笑顔なり 不仕鱈を月賦で拂ふことにさせ お役所の顔がきいての月賦なり 月賦まだすまぬに色が褪せかくり 靴の事打つてやらやく 月 賦 すみ 新調の月賦の服へ初しぐれ 何時までも月賦が俺を追つて來る 感激に先輩も來て泣いてくれ 賦とは見えぬ姿のモーニング 輩は萬事俺にと胸を打ち 雀 汽笛になれた姿なり 這ひ行 育し 躍 ず < 久米雄 麥 葉留路 禾 白 不 葉 留 水 郎 水 郎 水 禾 至 市 太公坊 水 岩 樓 白外郎 太公坊 葉留路 久米雄 末澤 かなめ 太公坊

食堂車通り拔けする用があり 食堂車しばし旅路を忘れさせ 堂車花瓶の花も疲れてる がかすかにふるふ食堂車 が占領してる食堂車 出張旅費をあてに 飲み 白外郎 葉留路 彌山 比呂志

葉留路 かなめ 葉留路 久米雄 太公坊

16

コーラスへタクトは躍る愛國歌 ハイキングみんな默つたきつい坂 洋裝を一人見つけたハイキング 『寺で 居眠りしたいハイキング ツクサツクは子供に負はかハイキング 草雲子 作 葉

## 岡町支部句會

會員七拾名突破祝賀句會

物思ひするタベなりコーヒ冷ゆ 商談がとうのひかけてコーヒが出 コーヒなどつけたりらしい二人連れ 開幕のベルヘコーヒを残して來 電話ずらり並んで移轉通知くる 發展を見込んで買つた土地へ住み 展の村を視察に來る閣下 發展、コーヒ、夕月、蛙、銅貨、のれん 綱五郎 紅多呂 香 笑 起 容

夕月へつと立つ影の細すぎる 夕月へ姉はどうやら泣い てゐる 夕月へおんなじ浴衣着 て出 新家庭コーヒ茶碗がよく揃ひ 月へ故郷は螢の出る時分 たされて夕月を見る戎橋 蛙汽車が間近になる汽笛 かけ 紅多呂 愁悠風雀 水 雀 のられんが破れて店がはやつてる 夏休みのれんの風へ子と夕餉 心捧をしたかひもありのれん分け 投げられた銅貨冷めたい音をたて 銅銭の釣りにこまつた滿員車

ちゑ子

波

潮 春 風 幸 春

花坊

芳

### 今治支部句會 (今治)

月

曜日憎や昨日の雨が止み

月

曜の早朝遊覧船

歸る

日曜日子のない妻をもて餘し

日曜どころかと外交靴をはき

六月二十三日 渡邊曉童報

仲直り質は白紙になり切れず 仲直り瘤をいた人しく眺 仲直り、日本刀、頑張 文 心 庫府

お辞儀したすきに個性をのぞかな

札は女の文字でよい借家

目の黒い内はと親爺頑張る 頑張つた足が一着しめてゐる 切れ味を試して見たい 日本刀双こぼれに武勳をしの ぶ日本刀 仲直りチクリくと痛 頑張れの聲殿りへあびせかけ 頑張れと書いて日記を書き終 頑張りの强さが結局ものを言 こんな時こそ待たれたり日本刀 父 さんの土産へ喧嘩仲直 大命へ手ぬかりはなし日本刀 直り足袋も羽織もぬい 裁の役に一升づく 直りせまい心を笑ひ合ひ み出 で飲 9 0 女松石平心曉心同松平石曉 庫調鐵尾府童府 調尾鐵童調童

潮風にこんなに肥へた腕を見

난 1) る

風

0 中

で健

康取り戻し 肌を見

遅刻した人に惚氣を聞か され お辭儀した後は淚の悔み客 そのお辭儀商賣人と見てとられ お解儀するだけがやつとの娘で育ち 素直なお辭儀へ先生チトあわて お辭儀をば輕く受けてる責任

潮風へ男女の影を見つけた

## 鶴町支部句會(大阪)

於 加藤ライト居

舌づ」み、 若さ、借家・ **炒氣、平氣、潮風** 岩橋双虎報

パノラマをのぞく銅貨をかへに來る 足入れたとこへ蛙が一つ飛び

人居る旅へ蛙が鳴いてくれ

伊佐緒

一枚の銅貨を探す灯のくらさ

葉

薬 坊

銘刀があつて借家に住んでゐる 押入れがも一つほしい借家なり 借家には過ぎた柱の鳩時計 腹立てた若さを岸で淋し 末席の若さできつい口をきょ 年寄に席をゆずつた若さなり 電柱の影にもたれてゐる若さ 失戀に若さが消へた顔となり でつかんしよ若さに勝てず座をこ 大家さんの顔も知らない家に住み 退職金借家をふやすことに決め 新開地借家ばかりの町となり 感情に走る若さも見とめられ 理解ある叔父に若さをひやかされ 張り切つた若さへ夜の灯が 口先で踊らされてる若さな 家の灯暗く歸りの遅い父 がり 招き 小柳子 よしみ 松太樓 双潮 5 9 巨 双 波 鐘 虎 花 士 花 醉 峯 鐘

### お土産を喜こぶ母の舌づ」み (大阪)

舌づ」み道頓堀を賞めちぎり

潮風へ妻こ 1 ち良き髪を撫ぜ

風へ赤銅色の

日曜日山へ行くよと家を出る 日曜日家にゐるのをじやまにされ H 日曜を忘れる程の忙しさ さらの靴日曜日からはき始め 日曜の朝から保険屋にみまはれる 日 たまの日曜ですと女房に連れ出すれ B 父の居る雨の日曜けむたいな 干物ためて休みの女事務 日曜は主人に子供まかしとき 日曜日親をだました金が着く 曜の全部豫約の若さなり 曜日圓滿振りの競ひ合ひ 曜の雨月曜の好天氣 直の電話の語氣のあらいこと 月曜日、雜吟、支那雜詠 丸島 利 香附子 同浩同方芳同春浩路正方浩 利 栞 同千芳君栞同 たけを 春 秋 二生甫正二生

> 旅 JJ

生生秀

ライト よしみ 松太樓 變 楠潮房變 峯 虎 花 美 教員と見られる本を讀む電車 出征の店で買う氣も女なり つくんへと漫畵になつたおのが顔 ゴザアマスとおつしやる夫人と肥り 商談もいつか女のことに觸れ 母親を泣かしたライカ 肩にか 身勝手な疲れと氣付く月 月曜日また土曜まで使は 勘を集めて廻る月曜 率が上らぬといふ月 曜日人目をよけるタイピスト 書製作所であるか いたみ れん け 柳 千栞柳

日の丸を掲げて戦争よそに見るどの邊の士にならうか支 那廣し黄 河 悠々たり 聖職 遙かなり いつまでも働蜂に似た俺 溢れ出る温泉へ母南無阿彌陀/ けしの花京の女の柔かさ 上役は上役だけの不平もち ハシの步を突く餘裕さへ無い暮し 贅澤さ季節の物でももの 足らず 船頭の小便へ渡舟待たされる カ. 路路柳千同正同栞同路利柳芳春方同路栞芳正路君同栞同利同 柳たけを 方利たけを 一巢正 秀

## 尼

運歩にしては汚ない 足であ ヤンチオに乘る繪日傘をなつかしみ 要人のどこか拔けてる姿なり 支那事變活字の足らぬ新聞 宣撫班保定の戀は忘られ 鞭 麞 嘯 々 黃 河 を渡る鐵兜 空襲へ刺繍の靴は大切なり 來たか張さんと老酒飲まされる 梅蘭芳のサインと云ふを見せられる 老酒のさめて淋しい支那の 認識の不足を知らぬ青龍

郎生秀秋

車は

楊楊をぬけてゆ

今日も又休みの欲し

顔で月

あめて居

IE -

片づけは明日にのばす花づかれ 四月十日 明日、幹事、寫眞機、保險、煙突 毬

明日々々と稼ぐ世渡り花盛り 幹事の挨拶がこの頃板につき 草に褰て金にあいたと云ふ形 友邦の使節に富士よ晴れてあれ 明日の事を云はれて猪口を下にき 明日へ用意の襲事が怠けがち 明日やめる友と最後の梯子酒 又明日と言へば淋しがる 隣の子 健康だけが明日からの資本なり 母だけが明日の試験に寝付かれず 店仕舞まだ今日明日の札を貼り 明日まで貸した五圓がそれつきり 國體旗卷くと幹事もあぐら 組む 幹事もう酒のきいたを知つて居る 幹事なりバスも電車も立ち續け ドングリの中から幹事選ばれて 酒ぐせを知つてか幹事遠く居る 母がした苦勞られしく聞かされる 合オーバ着たり脱いだり花見時 ばちだこにらすい親子のえんでした いやと云ふ返事明日まで待たされ ふところの都合散髪明日にする 値段だけ何時も見てくるライカな 寫眞機は醉つても首に吊つてゐる ねぎの花知らず國婦のいゝ幹 露路に住み人氣者です幹事です 幹事して妻の苦手を聞く朝ぞ 逆さまの意見があつて幹事で居 打水をするまで幹事眼がといき 瘦せて居る幹事肥へてる幹事來る 藝人の水を幹事はくまされる 幹事又下駄の變つたぐちを聞き いわれある松幹事さつさと先き行く 心臓の弱い幹事へ妓が惚れる 店員がした様に寫真機持てず 蛙一つ幹事と向ひあひ 席の幹事としての下足番 算が上手で損をせぬ幹事 内で三年續く良い幹事 美知夫 久仁子 南濃路 久仁子 南濃路 紫水 榮句坊 川柳 美知夫 正覺坊 久仁子 柳千 寄與史 毬 南濃路 寄與史 毬 水 濃路 朗 水 夫 朗 千 舟 31. 舟 美

寫眞機へ母は少こうし 寫眞機へあたまは伸びたまゝでよ 保險の掛け終る年を笑ふてゐる 賞 寫眞機へ大瞻に添ふ許婚 寫眞機へ明日の天氣は大丈夫 寫眞機を据え子供等のえくぼ待つ 寫眞機を提げて要塞近くなる 逆境に寫眞機だけをはなしかね 寫眞機ヘヴエランダの空雲もなし 保險金告別式へ知れ渡り 保險屋は親類の名を聞きとが ふと氣付く白髮へ保險手に這入り 趣味の道ほめて保險を奬める氣 使はれる身に保險ありつゝがなし 保險の話猫まるうなりまるうなり 保險屋へ滿期を笑ふ若さなり 暮しむき知つて保險屋見逃さず 保險金遺族へ淚あらたなり 保險金寄附をしてゐる様にかけ 幹 寫眞機があればと思ふ子が笑ふ フイルムが残り絶景暮れんとす ほそんへの生活煙突屋根を拔け 煙突は風呂屋ばかりの里に住み 煙 留守にする日の煙突は見上げられ 煙突の影が少さいビル ディング 事横 かけた幹事ねずみにのぞかれる 險もら滿期他人の噂する 品の事で幹事は雨に逢ひ 散をたくみに宣す老幹事 眞機がほしい 近代的 **真機に心の隙を覗か** 突の片側ぬれて雨がやみ 跡の 突の下で銃後の汗を出し 突が夜勤の窓にだゞ黑し 煙突空は日本晴 暴 煙突のない面白 親類の酒にする 横をむき 女性 れる 久仁子 南鮎 水 吉毬 力 一 同 同 鮎 毬 同 濃 路 美 斗 朗 夫 夫 利 美 夫 南濃路 力同同萬 南濃路 柳 南濃路 寄與史 水斗 榮句坊 萬樂 同同 同鮎同 南濃路 川同 同 萬 同 柳 毬 夫 樂 夫 樂 千

### 雜川 岡町支部川柳處女會

池田悠起居

美

中元に貰つた下駄が役に立ち 誘はれた傘へ五月雨きつくなり **廣場でやろうと喧嘩ふきかける** 矢車の花踏みそうなみちへ來る 姉の手に百合は冷たい香を放ち 寄り合ひはたくさん下駄がぬいでき あの人の好みの下駄がぬいであり 腕時計腕へすべつたま」出かけ プロペラの音を待つてる 腕時計 腕時計忘れたまるで湯にひたり 五月雨にぽつかり浮いた大阪城 貸家から猫が二、三匹走り去り 溜池に下駄片方が浮いてゐる 一輪の百合が勇士を慰める 百合の香りの中に通夜となり 場の片一方に **廣場、五月雨、腕時計、** 畑が出 百合、下駄、 小夜子 波奈子 美惠女 波矢子 秋子 貴美子 悠 起 美津枝 秀 小 起 起 女 美 菊

## 會(大阪)

寺井

4

報

レーテストフアッション娘颯爽と 松風も村雨も今はアッパッパ 偉いもんです娘洋装似合ひます 親の罪金で濟まないのをなげき

同同同同路同

郎

ンドンに兄がゐますとハイヒー

舟

ららめしく手で雨を見る夜店出し 名物といふが小さい屋豪店 緣日で値切つた植木花盛 たそがれの露店默つて並べてる 白足袋を履いて露店に氣が引ける 出獄で罪は消えたと思ひしに 奥様に罪と上手に逃げられる 罪だつせなどゝ仲居は持ち上げる 罪の子等など、勝手に牧師言ひ 宿り木のやらに銀座の露店映え 洋装は森の小道を飛んで來る 藝者一人バスに眼のつく堺筋 罪の子は母親だけが負ふものか 白して氣も爽かな五月 き人を呪ふか藁人形 露店、罪、雜吟、洋裝 鋭 雨 々月 被夢造 しげる 波夢造 しげる

ペンキ塗りたて煙突の春

天皇の御稜威徐州もなびきたり

徐州陷落佛壇へ母すはるなり

都之介

自

洋裝の痛々しくも切れ話 步を運ぶ洋裝金魚の 洋裝で祖國を慕ふ美しさ 洋裝の母娘姉妹かと思ひ 洋裝で娘は足が太く見え 簡單着で氣取つた寫眞ひやかされ せめて洋装娘時代で止めて吳れ 洋裝をさせて車へ先きに罪せ 洋裝に手間取りし頃のなつかしさ 花月でも洋装乙にすましてる スタイルの雑誌洋装よけれども 装も歸ればやはり女なり 裝に父の頑固の粉煙草 單衣母洋装のつもりなり 裝を先頭にし 装で處女で四十のタイピスト 装をして組足が癖になり 裝の奥様矢張りお壽司也 モルガンお雲歸る て舗道 尾 0 行き 波夢造 山雨樓三 同 しげる 同同 同跳 同酮 同 同 同同 月

六月十四日 松江支部句會 於勝谷山川兒居 (大阪)

洋裝でその母よりも脊が高

L 3

洋裝もいるが疊へ椅子を置

**螢籠をんなのうでのしろいなり** 螢ふと空の高さに舞ひ上 汽車の窓迷ひ込んだる野の登 空 襲に取り残された迷ひ犬 襲下青葉若葉に風があり 襲の眞下鈴虫鳴いてゐる **螢、空襲、徐州、夫人、雨** Щ JII 1 兒 柳錦人華 都之介 山川見 登美也 紫薇花 報 下駄はいた車掌乘つてる田舎バス 初戀よと女給一ぷく吹き 上げ 借しいバスじやけんにドアー締を行き 世界中にたつた一人のひとが出來 あきもせぬ同じコースをバスめぐり はりこんで一區乗り越す雨のバス ふんばつてつり錢渡すバスガール 山菓子の切符でバスに威勢よく

同 耕同

バスガールの親切を母手眞似でし

華

榮轉ヘビールの泡があふれ

出

喜紫

山香 郎

畜生と云はれて死んだ蚊 が轉び 何處の蚊も同じと故郷の祖母は云ひ 蚊の行方見て居て思案 忘れかけ 雨止んで一寸伸びた胡瓜の 興奮の夜更の雨 慈雨沛然トマト 良心に恥ぢる夫人の身だしなみ 白欅あれが社長の夫人なり どう見ても第二夫人としか見へず 小糠雨倬が小さくなつてゆく 夫人兎角に筆で書き給ふ を突いて行き 畑の丈が伸び 登美也 紫薇花 都之介 山川見

松坂俱樂部句抄 ス

魚

あゝあれがわしの初戀だつたらし 田舍道どこでもとまるバスがあり 盛裝の女をヂロリバスガー 初戀の相手はららです ゝ ぎもの 初戀にみじめなけりをつけにけり 初戀の苦しさ猫に打明けて 初戀の實を結んでるらら長屋 車庫入りのバスに車掌の晴雨傘 運轉手バツクミラーで車掌を見 いとこ同志からまづ戀ごつこ 生の重荷となつた初戀 便 スガール膝おしつけて切符きる り札腰に公休バスガー 戀は今別々に子 戀は村の學校に置き忘 から 來る 頃 娘庭を掃き 澤 n Щ n 3 美根子 同同 同 生 同 同同同同同 同 同 同同 一々庵

> 戀人が居たら と思ふ バスの よいもんやろと婆初戀に茶をするめ 島國の文化を運ぶバスに 乗る 覧車女房の様に車 事乗り 景 同同同 くもを

鳥

老夫人遺産をゆずる人もなし

都之介

## 下關支部句會

菙

於昭和園松岡氏邸 急行、女生徒、眼鏡 多田市多樓報

女生 女學 入選を親に知らせる飛行 大切な話 に眼鏡そつと除 梅雨の風母入れまいと窓を閉め 子を持つて學生氣分の取れた妻 非常時は女學生にも銃持たせ 母危篤この急行ののろいこと 大阪も降つてるニュース梅雨 制服の女生徒奉仕の鍬をふり 女學校でおそはりました 三口 急行は小さな 驛 をゆすり立 行で一汽車先の友を追 徒 生 0 御 飯 夢 美 焚く事迄習 しき花言 け 葉 O 便 九呂平 市多樓 九呂平 市多樓 余志雄 余志雄 同 去 角 尾 來

子の手柄だと聞いて父眼鏡かけ 小説に眼鏡を掛けたまゝ蹇入り 鼻眼鏡睨みの利いた顔になり 老人の眼鏡は鼻の先に在 **敷睨みとは知らざりし色眼** 金線の婦人ながく敗けて居ず 遠眼鏡五錢で觀せる此の景色 b 余志雄 九呂平 比呂志 九呂平 市多樓 Щ 山尾

日本人としての 新入社軍歌となつて摩を上 伸びる地へ測量杭が打ち込まれ 果しなく伸びる日本の地岡の色 盆栽は伸びな伸びよと切られてゐ 子よ伸びろ伸びろ六月の陽が高 縫込を取つて不常着におろ 小金ある家らし蔦が伸びてゐる 満場を伸び上らせてツー・スリー 背伸してさて日曜をもて餘し 一點軍歌の隅に 漕で親子の軍歌よく揃 軍歌の有難さ

Z)

勝つて來る意氣は軍\の中に居る 一番目は知らぬ軍歌に族をふり 歌もの子供の方がよく覺え 泣

> 秀 万

Ξ 喜 柳 喜 喜 紫 万 某 柳 某幸 秀 喜 紫 4: Щ 山 香 的 生 太 路 太 人 太 生山

### 告席の舞見中暑 ★宛 は

大阪市西成區玉出本通三丁目

JII

柳

雜

誌

社

一區ならばこ」で降りますバスの客

同同同同

雜川

大鐵局支部句會

(大阪) b

六月十三日

於

大阪電力事務所

水

伸びる、榮轉、

鏡、

軍歌 客

雪某

大事

眼鏡を拭いて改ま

弄がすんで眼鏡を拭て掛け

市多樓

★一頁 <u>★</u> \_ \_ \_ \_

+

П

員

(幾口でも)

★締切

七月十七日

戀も二の戀もなく蔚と蓝

≯切 ★ごうかよろしく ★なるべく振替を御利用で 手 (振替大阪七五〇五〇番 代 用可

貧乏にかいはりもなく子は伸びる

コンパクト最初にらつ す鼻の

ふりかへる姿がらつる洗面所

新

の色で姿見場所をとり

ひとり居のふと恐くなる壁鏡

榮轉の蚊帳はあちらで買ふつもり

轉へ窓

カ:

明るい展

中 **全** 應召に際し川柳家の皆様が多数お見送り下さいまして一家の光榮 とれに過ぐるものはありません今後 が本位ですが不 を申上げるのが本位ですが不 を申上げるのが本位ですが不 を表現るに際し川柳家の皆様が多 河內郡柏原町本鄉

成 武

▲投句は本社發賣

投 稿

規

定

投句用箋、

官製葉

募

集

\*\*\*

\*\*\*\*

後

書又は同型の厚紙

紙に認

80

住所氏

に各種各題

必ず別

十五卷

第九

號課

題

名雅號を明記する

七月廿日

締切

(十句以內)

須麻

豆葭

秋乃

崎

題

事。

### (順はない) 々人の係關社

+ 藤國長長長田嘉笠片岡大長池 麻 助 幹 村枝野岡崎中納原岡本道谷澤員 生 4 JII 史晴太柳辰 路直一弘\_ 路 作即濱郎秀二純生方平雄徹居 郎

米川川龜小大大大沖鳥伊 末淺赤頴藤 員以田井原本 村村上井川西谷島野 llı 藤 Ξ 長五. 岩 巖 長五 岩 三花濤三一彦 卯 の 三 ん花太晟 清退之 太 馬菱郎修武郎村明郎歩造 郎一

橋洞 森小藤蛭篠柴前前安窪高生谷田 林里子原谷田田川田尾方脇村 本會 久銀 不 辜 孝 不 東 浪 好 省 春 二 五 雀 留 波 亮 敏 素 之 綠 魚人古二雨郎健郎美樓雄郎交介

春須大妹吉市村姫水北岩 奧永西福高 元崎西尾田場松田谷山崎★村田田田橋 里 没 山か 紀豆八變水食夢夕鮎悟柳 丹十州雨ほ 太秋歩人車子裡鐘美郎路 路九樂樓る

岩金大丸黑正鳥加近江原中石宮後西松 橋田坂尾川 本生藤 藤 戸 西曾岡藤 ラ 3 お根 い小 双並形潮紫水古イ つ史さ民白青わ柳 虎木水花香客弗ト勇る風む鄭峰兒を子

### 幹 ٤ 部

松 江 支部(松江市) 建镇堀支部(大阪市高) 知 支部(高和歌山) 大阪市高 知 支部(高和歌山) 大平 支部(高和歌山) 大平 支部(大阪市) 大阪市 支部(島根縣) 文部(高知市)文部(大阪市) (大阪市) (大阪市) 市 市 市 市 市 市 宮岡 白峰 京岡 白峰 水國龜北庄谷澤井山 勝谷· 中島 11 山川 わを

渡墙第 本 等 漢 漢 資 美 子 夫

▲締切は殿守され ▲書體はなるべく楷 ▲文章は二十字詰原 ▲「川柳塔」への投句 ◆投稿其他につき 各地會報は 稿紙使用の 曹川柳雜誌原稿 原稿紙に清配の事 及不朽洞會員に限 信料封入の事。 問合せはすべて と封筒に朱記の事 は川柳人協會役員 事。 华紙判 返 御

寫眞 化 毎 機 號

作柳 柳壇 梅 介會 十雜 何吟) 쨦 生 路 郎

章 地

(評論研究感想吟行漫

文漫畵

▲「近作柳樽 家の雜吟を 募る。 は 海山

第十五卷 粧 八月廿日 第十 岩 高 一十句以 號課 橋

か 柳 13 3 路 選選

▼またあつくなつた。事務所でペンを走らしてゐると太陽が直だ。これも一つの戦争だ。頭よが。これも一つの戦争だ。頭よが。これも一つの戦争だ。頭よが。これも一つの戦争だ。 東朝 紙飢饉がいよ とになった。 考へなければいことになった。 考へなければいるとになった。 考へなければいるとになった。 考へなければならない。 ●誌上で「川柳解題と例句」を編 をにした。これは出來れば每號 とにした。これは出來れば每號 をいかも知れない。ス・フのや ないかも知れない。ス・フのや ないかも知れない。ス・フのや なな特異な時代色のある題を目 を記述がしたいと思つてゐるが忙し ないかも知れない。ス・フのや ないかも知れない。ス・フのや ないかも知れない。

店書捌賣

載轉斷無禁

事 發 行

所

据替 央阪七五〇五〇番電話天下茶屋二五七九番

(筑前橋照停前)

支 務 所 東京市 蒲田 電昭大

石塚 (京都)三宅 (名 大阪) 大寶捌大寶書店 (東京) 電話土佐堀三三三・八一昭和ビル二〇一室大阪市西區江戸堀 展 第三昧堂 (神戶) x(東京) \$\$ 東京堂 \$\$ \$\$ \$\$ 即文: 店 川 柳 雜 誌 社町女塚町二丁目ニニノ ○江 振電 (戸)米田寶文館 里 続く 巖松堂 もっ吉明文堂 朝日ビ 一六三八 東 明日だっ古 京 」岡書店 ル書店 八一六四 支

社

(名古屋) 静觀堂

〇御

送金は

振替せ

座欠阪七五〇五〇

番へお拂込みになるのが一番

月號よりと御指示願ひます○韓居又は改號等の節は舊新併記の 確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には

和十二三

一年七月

7一〇日印刷

第十五卷

+

五第

發七

行號

輯

大阪市西成區玉出本通三丁目

三六番地

幸

郎

大阪市西成區玉出本通三丁

月三六番

誌地

定

價 簡年 簡 年

前金、特輯競共)三圓 前金(特輯號共)壹圓 六十錢 卷

料告廣

御相談に應じます。一報下さいますればては事務所へ直接御本誌への廣告に就い

### ルービヒサア

社會式株酒麦本日大

櫻 ビ そ 君 ビ と し と 路 坊 ル こ 路 坊





めにた

へ導くことにあります。 ない はカルシュームを補給し はカルシュームを補給し おを でいる できる ならしめ 「安産」 が しょう かんりょう できる はんしての大切な責任



# ルシューム 全



**火正十三年三月三日第三班総属物配可、毎月一回十五日發行)** 

JII 柳 雜 誌

> 0 4

定 價 金 3 0 錢 送料

> 壹 鎹

りとびきに



大評判の薬です。ゼヒお勵めしたい薬! 薬さして

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ・
はいれるがスツキリと美しくなるので美容薬としても大へんよく入浴後や洗しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても大へんよく入浴後や洗しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても大へんよく入浴後や洗りおりになるときである。 蚤蚊南京虫其の他毒虫でカ 1

時にもとても便利な藥

最	粧	0	ヹ
適	下	妆	=
1	VZ	化	殯